

# ユニテ

UNITÉ

## 15



### 目 次

ロマン・ロランの言葉 .....	1
ロマン・ロランについて思い出すこと .....	日 高 六 郎 ..... 2
雑感：《ユニテ》への歩み .....	山 口 三 夫 ..... 6
ロマン・ロランと王元化先生に捧ぐ .....	相 浦 杲 ..... 9
『ジャン・クリストフ』について .....	王 元 化 ..... 10
かさねて『ジャン・クリストフ』を読む .....	王 元 化 ..... 16
ロラン＝マルヴィエダ往復書簡(補3) .....	南大路 振一訳 ..... 30
ユニテの広場 .....	寺尾 文成・織田 和夫 ..... 53
友の会だより .....	57
あとがき .....	60
研究所図書目録(8) .....	(付)



日本・ロマン・ロランの友の会編

## ロマン・ロランの言葉

一人であるということは誰にでもゆるされるものではない。多くの人、ひそかな誇りをもって、孤独であることを嘆く。それは幾世紀の嘆きである。それは嘆く人々にはわからないが、孤独が彼らをえらんだのでないことを証明するものである。彼らは孤独とお馴染みではない。彼らは一番めの扉をあけた。そして玄関で待ちくたびれる。しかし自分の入る番を待つだけの辛抱ができなかった。それとも抗争などしたために、ていよく追い出されてしまったのである。孤独という友の心のなかに入りこむためには、聖寵の賜か、それとも敬虔にうけいれた試煉の恩恵が必要である。道路の埃や、外部のかまびすしい声や、利己心、虚栄心など卑しい思想、裏切られた愛情、傷つけられた野心などの憐れむべき反逆を戸口で棄てなければならぬ。金の書牒メソレツトによって、消えゆく声を私たちにつたえたオルフェの純い影ソのように「苦悩の圏をのがれた魂」が「記憶の湖から出る氷の泉にただひとり裸身で」赴かねばならないのである。

それが「復活」の奇蹟である。己が骸くわいを捨てて、すべてを失ったとおもう者は、今日から、真の己が幸まに入ることを発見するのである。自身のみならずまた他の人々も彼に戻されたのである。

……中略……

すべての人々、彼の家族、妻、子供たちはばかりでなく、それまで、雄弁的な愛の中で、抱擁していると彼が勘ちがいしていた幾百万の人々。彼らはみな暗室の奥にきて映った。人類を押し流して行く「運命」の暗い川、そして彼が人類と混同していた川のうえに、もがきくるしむ幾百万の生きた漂流物——人間が彼の眼に見えてきた。人間の一人一人が自我を有し、一人の人間が喜悦と苦悩、夢と努力の一つの世界だった。どの人間も自分だった。私は彼のうえにうつむく。そして私が見るのは私である。「私です」と彼の眼は私に言う。そして彼の心は私に「私です！」という。ああ！ 私にはあなたがじつによくわかる！ あなたの過ちはまったく私のものです！ 私を攻撃する人々が躍起になるところにも、私はあなたをみとめる、兄弟、私はまちがいはしない。それは私です。

宮本正清訳『クレランボー』から

## ロマン・ロランについて思い出すこと

日 高 六 郎

私がロマン・ロランの名をはじめて知ったのは、1932年、中学(旧制)の4年生のころだったと思う。ヨーロッパの文学・思想を解説している1冊の本のなかに、ロマン・ロランの1章があり、そこに、「ジャン・クリストフ」とともに、ロマン・ロランとアンリ・バルビュスの論争がかなりくわしく紹介されていたことを思い出す。

その論争とは、1921年、ロランの『精神の独立』宣言にたいするバルビュスの批判からはじまったものであることはいまでもない。私が『ジャン・クリストフ』を読むのは、高校(旧制)にはいってからのことだが、じつは中学生の私は、ロランとバルビュスの論争にまず強い関心をひかれたのだった。ちょうどマルクス主義について勉強をはじめていたころの私であったが、その1、2年まえまでは、私はトルストイに心をうばわれていた。多分、そのためであったと思うけれども、私は、ロランにもバルビュスにも賛成したいところがあり、両者にはさまれて心がゆれ動いたのであった。もう少し分析してみると、心情はロランに共鳴し、論理はバルビュスに傾く、ということだったともいえよう。マルクス主義の勉強ををはじめたころの少年としては、そうなるのも無理からぬことだったかもしれない。

<目的と方法>をめぐるロランとバルビュスの論争は、じつはいまでもさまざまな形でくりかえされている。私自身、17、8才のころ考えあぐねたその問題を、十数年後、つまり敗戦後にまた取りあげて、「ベルグソンとデモクラシイの心理学」という一文のなかで改めて展開した。政治における<目的と手段>の問題は、ほとんど永遠の課題と言ってよいのである。

上京して東京高等学校にはいったとき、ドイツ語を第一外国語とした私は、フランス語の勉強もしたくて、渡辺一夫先生にお願いして、ロマン・ロランの『ベートオヴェン』を教科書に、7、8人の小クラスをつくったことがある。「窓をあけよ」という言葉にはしまる『ベートオヴェン』にいきなり取りくんだけれど、なんと

か読みつづけていった面白さは、いまでも忘れられない。

そしてそのころ（1937年）白楊社という左翼出版物を出しているところから、ロマン・ロランの『闘争の十五年』（石井友幸訳）の翻訳が出るのである。それは、かたい表紙に赤い絹のような布地がはりつけられた本で、かなり高い定価がついていた。私は、伏字の多いその本を求めてきて読んだ夜の興奮を、いまでもありありと思い出すことができる。

いま若い人たちに戦前の日本についての印象を尋ねると、かなり気になることがある。若者たちは、戦前の日本、とくに15年戦争時代の日本を、一切の自由が抑圧されていた暗黒時代と想像している。たしかに太平洋戦争にはいつてからは、そうであったと思う。しかし満州事変が起ったころは、それを帝国主義的侵略と批判する言論もまだ存在していたし、ナチスの政権奪取やドイツ国会議事堂放火事件などを弾劾する文章も書かれていたことを忘れてはならない。戦前を黒一色の軍国主義時代、戦後をバラ色の民主主義時代といったとらえ方が市販の社会科的な教科書には強いけれども、それは決して真実ではない。『闘争の十五年』の翻訳が戦前に出たことも真実であって、その側面を見のがしてはならない。なぜなら、そのことを忘れると、なぜ若干の自由が存在していたにもかかわらず、それが全体主義の狂気に圧倒されていったか、その教訓を十分に学びとることができなくなるからである。

同様に1932年8月にアムステルダムでひらかれた反戦世界会議の議事録もまた日本ではすぐに翻訳され、刊行されたのであった。それは、第一書房から小松清氏の訳で発売されたと記憶する。高校の学生であった私は、新宿の紀伊国屋書店で店頭にならぶのを待ちかまえるようにして、それを求めた。当時は、発売後すぐに発行禁止処分となることがよくあった。そうになると、警官が店頭から雑誌や書籍を持ちさって行くのである。しかしそれ以前に入手していれば、それをかくして持っていることはできたのである。そうした方法で、私は発禁になった「改造」や「中央公論」やその他の発禁本などを手にいれたこともあるのである。

私は、ロマン・ロラン起草の大会宣言やその他伏字の多い報告を、想像力で補いながら読みつづけた。いまこの宣言を読みかえして見て、私は改めて戦争に反対す

るために、団結し行動することを訴えるロランの決意を強く感じる。ひょっとすればいまの若者たちのなかには、ソヴィエト連邦の擁護を力強く訴えるロランの思想が十分理解できないというものもあるかもしれない。たしかに1930年代のロマン・ロランは力をこめてソヴィエトを支持しつづけている。そのことで、かつての論敵バルビュスと協力している。バルビュスは、アムステルダム大会で議長をつとめ、ロランはその公平な運営をたたえているのである。いまロランのソヴィエト擁護、あるいはスペイン内戦における人民戦線擁護について、いくらかの異和感を持つ人たちがいるだろう。しかしロランの当時の選択には已むをえないことがあったと思う。私は、とくに1945年以後、つまり戦後の日本で、ソヴィエトをユートピアであるかのように宣伝し、ほんのちょっとしたソヴィエト批判にたいしても神経質になった一部のマルクス主義者には同調しなかったものである。しかし、日独伊のファシズム戦線が成立していた30年代において、ロランが主要な敵をどこにおいたかについては、彼は決してまちがっていなかったと考えている。たしかにロランは20年代のはじめには、ソヴィエト革命が犯している強権的方法に批判的であり、それがバルビュスとの論争の争点となったのであるが、しかし30年代、歴史はきわめて危険な方向へ動いていたのである。しかもロランのユマニズムは、ソヴィエトにたいする100%のべったり主義とはならなかったし、そうではなかったからこそ、「正統派」からは何度となく批判されたのである。

そうした歴史の機微について、私はもっと書きたいと思う。しかしいまここでは、二つの大戦のあいだに書きつづけられたロランの反戦と反全体主義の文章——『戦いを超えて』、『先駆者たち』、『斗争の十五年』、『革命によって平和を』——を読むとき、うたがいもなくそこに流れている一貫したひとつの意志を指摘することにとどめたい。それは、人間の尊厳と精神の自由を守りつづけようとする高貴な衝動である。それはロランの倫理的義務感とつながり、宗教的感情に接し、また芸術家的感性と結びついている。そしてロランの言葉が彼の心の奥底から発せられたものであることは、だれも疑うことはできない。彼は、そのことで、二つの大戦のあいだで、最も影響力のある知識人の一人となったのである。

第二次世界大戦から次の第三次世界大戦(!)——もしそのことを予想せざるをえないとするならば(!)——までのあいだに、ロマン・ロランに匹敵するような思想的営為は存在するだろうかという突飛なことを考えてみよう。その問いが不吉すぎるといふのであれば、第二次世界大戦から次の世界大戦への危機に歯止めをかけることができるときまでのあいだに、と言いかえてもよい。いま私は、世界のなかの賢者たちや思想家たちのあれこれ——たとえばアインシュタインとか、ラッセルとか、サルトルとかの故人をふくめて——を考える以前に、ロランがなにに期待をかけたかを考えたい。それは、一人の偉大な思想家の出現ということよりも、数多くの知識人、圧倒的多数の民衆の思想と意志の登場であったと思う。ロマン・ロランの希望は、多分、<精神の自由>の自立性と、<魂の共有>の連帯性とを結びつけて、知識人と民衆との共和国をつくりだすことにあったらうと思う。たしかに、現在の世界の全体的な危機に直面して、私は、そうした努力以外に、真に危機に歯止めをかける力は存在しないと信じている。ロマン・ロランを愛する人たちに、私はロランのアムステルダム大会に寄せた宣言文の一節を提供したい。「われわれは断言しよう。行動こそ思想の目的であると。行動を目的とせぬ思想は、すべて流産であり裏切りである。それゆえ、もしわれわれが思想の奉仕者であるなら、行動の奉仕者でなければならない。われわれは今こそ真の知識人の名に値する知識人と、生きた行動の本質そのものである人びと、すなわち労働大衆との間に、盟約を結ばなければならない。」

そのときから半世紀たったいま、知識人と大衆という二つのカテゴリーで考えることには、若干問題があることは否定しない。知識人は大衆であり、大衆は知識人であるとも思う。しかし問題はそのことよりも、ロランが心あるひとびとに<行動>を訴えたところにある。ロマン・ロラン自身が歴史に働きつづけた人であったことを、核戦争という破滅的な危機の可能性のなかで生きている私たちは、決して忘れてはなるまい。

1982年 秋

## 雑感：《ユニテ》への歩み

山口 三夫

ここ数年、この静岡で、いろいろな機会に顔を合わせ、月に1回か2回は必ず会っている人でも、ロランの名において声をかけられたことはなかった。そしてぼくから、ロランを話題にすることもなかった。

静岡へ来るまえの日野市、そのまえの調布市における十数年より多くの知人を得たが、ロマン・ロランを語ったことはない。大学のなかには、ぼくをロランに結びつけている人はもちろんいるが、とくにロランを話題にすることもない。

しかし、マスコミ（とりわけテレビ）の怖さでも言うのか、いわばパレテしまったわけである。別に隠していたわけではないが、いつも緊急な日本のことがらを話す集まりで顔を合わせる人が多いから、ぼくが大学に籍をおいていることは（こんな地方都市だから）みんなに知られているが、それだけのことにすぎない。そしてぼくのほうも、相手の職業や何かを知らない人のほうが圧倒的に多い。

そんなことよりも、テレビを見ましたよとご挨拶するだけの少数は別として、例外なく、真剣な目で、自分はロランが好きだとか、愛読したとか（この場合、今も……と付け加える人もあるが）、『ジャン＝クリストフ』によって生き方を教えられたとかと、告げられるのである。

ぼくは胸に熱いものを感じながら、言葉少なに対応するのみで、まだ対話が始まっているわけではない。しかし、現在直下の問題を話したりある種の行動を組織したりしながら、あの人もあの人もロランに影響を受けたのだと思うと、ロランの名を口にしなくても、さらに言って、イデオロギーが違っても、《心から心へ》の響き合いがあることを確信している。

読書調査的な面では、ロラン流行現象が去ってからすでに20年と、久しいが、ロマン・ロランがわれわれ日本人に今も（過去の歴史には触れず）確かな刻印を押しつけていることの意味は重い。だからこそなおに、「第3次ロラン全集」にいささかでも協力できたことをよろこぶ。読みたい人が、読みたいときに読めるように

しておくためであり、公共図書館を含め、最低限の読者がこの「全集」を支えていることを、出版者とは別に、訳者の一人として感謝したい。

ところで、ぼくは生意気な青年時代から、翻訳者より翻訳読者のほうが著者の本質や精神を把握することがありうる、と考えてきた。問題は「研究」ではないからで、でなければなぜ翻訳をするのか？……だから、自分が翻訳者のハシクレではあっても、編集者や会社員や失業者であった時のほうが、気が楽であった。そのうち、「われわれ若い者が……」と言えなくなり、大学に籍をおいた。

そして、世の中の偏見に抗するためには、こと自分が翻訳したことのある作家や著作家に対してと同じく、会ったことのない、その機会もない読者に対してはことに、襟を正さずにはいられない思いであった。しかも、ロマン・ロランのような人間が対象の場合、口でとやかく言ったり、文章に書いたりしているだけではどうしようもなかった。

ロマン・ロランはぼくにあって、そうした人間として生きつづけた。だから、ロランについて言葉をついやすよりも、一人ひとりが人間となりつづけ、彼が願った国際平和、人類の《ユニテ》に向って、ぼくなりには歩きつづけるしかなかった。その時、ぼくにあって、ロランを講釈するよりは、この日本で自分なりに行動する道を探ることが大切だった。

だから、アフリカや《アパルトヘイト》も口にした。貧しい知識からしても、ロマン・ロランを語るほうが正確を期しえただろう。しかし、いまだに正確な知識も披瀝しえないアフリカに、ぼくなりには取組んでいる。そして、ぼくにあって、問題は日本人である。

その日本人とロマン・ロラン——いっけん奇妙な取合わせだが——このことの意味は重い。それを今、最近、あらためて身近かに確認しているわけである。あらゆる年齢層に、そしてさまざまな職業の人に、ロマン・ロランの作品から生きる力を汲んだばかりか、汲みつづけている人たちが存在する。

一つ論文を書いたり翻訳したりして、独り秘そかに悦に入りかけていた自分を、恥ずかしいと思う。そして思い出す（これまでは間違であったが）——学生の自主ゼミでハッとさせられたり、女子高校生の素朴な質問に（少しは背伸びしているこ



とがわかりながら)戸惑ったり、普通の会社員や主婦から(文化人志向の人はダメだが)一つの充実感による衝撃を受けたりしてきたことを。

そして、ロマン・ロランをはじめ沢山の名を教室あたりで出している人たちより、ぼくは、そうした人たちに教えられてきた。励まされてきた。ぼくがロランを翻訳したのは、しているのは、そういう人たちのためであって、いかにも原文で読んだかのごとき論文を書く少数のためではない。

ロマン・ロランをひけらかしたり、メシのタネにしたりせず、黙々と自分の世界で自分の道を歩みつけている人たちこそが、(もちろん、ロラン以外のだれに力を汲んでもいい!)、たとい目には逆行と見えるときでさえ、真面目に歩きつけている限り、まさに人類の《ユニテ》を築きつけているのだと思う。その実感はますます強い。

最近ぼくに、ロマン・ロランを名にあげて話しかけてくれた人たちとは、たぶん今後はロランのことを話すことが多くなるだろう。しかし、たぶん、ロランの話をしている暇はないだろう。まして、この静岡に、ロランを話す集まりを作る気は、少なくともぼくにはない。翻訳さえ本になっていれば、読む人は読むだろう。

しかし、あの脚の不自由な彼とは、『ジャン＝クリストフ』の話はできなくとも、彼のやっている人権擁護の「アムネスティー」や「死刑廃止」の会で会いつづけるだろうし、もっと脚が不自由でありながら、月例の超ミニ「平和デモ」を歩きつけている彼女とも、目と目でロランを語るだろう。

人類の《ユニテ》への願いとその歩みの底にいるロラン、その他、皮膚の色やイデオロギーを超えた人びと——問題は《ユニテ》へのそれぞれの歩みである。

明日は、フランス留学時代にロラン未亡人も手伝った若い化学者が、学会か何かのついでに訪ねてくれるという。仏文学者や哲学者に会うより楽しみであることは隠さない。

(1982.11.7)

## ロマン・ロランと王元化先生に捧ぐ

—『ジャン・クリストフ』を通して—

相 浦 泉

1981年の秋、私は家内とともにある訪中団に加わって上海市内の錦江飯店というホテルに止宿していた。ある日、前から存じあげていた復旦大学の蔣孔陽教授がひとりの上品な感じの初老の方をつれてきて私たちに紹介してくださった。いかにも中国の古く良き世代のインテリらしい方だった。眼鏡の奥に深い知性を秘めた柔和な目で丁寧に謙虚にあいさつをされた。それが王元化先生だった。上海では聞くことのまれな共通語ではっきりと話された。私たちはその翌日、復旦大学の中文系主任、胡裕樹教授や章培恒教授とともに日本総領事館に立ち寄った後、王元化先生のお宅へお邪魔した。上海戯劇学院教授でシェイクスピアを専門にしておられた張可夫人は病いで床に臥せておられたのだが、わざわざ私たちへ挨拶をするために出てこられた。王元化先生は、あなたが上海にいるときは、いつでも私の家へ話しにきてください、ここはあなたの家も同然です、と言われた。その暖かさが今でも私の心の中に残っている。その日は玉仏寺へ案内してくださったのだが、門前にひとり中年のご婦人が立っておられた。それが女流作家の茹志鶯さんで、その後からかなり年配の呉強さんが近づいてこられた。いずれも王元化先生と蔣孔陽先生のご配慮で高名なお二人の作家をお呼びしておいてくださったのである。寺を見学の後、寺内でめずらしい精進料理をいただき、ビールに銘酎して私はこれらの先生がたまただいぶ議論をしてしまったのだが、今から思えば、恥ずかしさも先に立つが、ほんとにうれしい思い出もなっている。その翌日は、上海作家協会で座談会を開いてくださり、私は主として自分の翻訳した王蒙『胡蝶』について意見を述べ、かなりにぎやかな討論になったが、今はその詳細は省略する。座談会が終ってから、王元化先生は作家協会の裏庭へ私の手をとらんばかりにして連れていかれ、こんど上海へ来たなら、きっとまたここにいらっしやい、となんどもおっしゃるのだった。私ども夫婦は団の予定でそのまま先生とお別れして車に乗った。今でも王先生のことを

思い出すと胸が熱くなる。帰国してからは手紙の往復をするばかりだが、その間にも2冊の本を送って来てくださった。その中の1冊が、王先生の「真実に向って」という評論集で、その中にロマン・ロランについてのものが3編含まれていた。しかも、それを読んで私は先生のロランに対する尊敬と傾倒の深いことを知った。今、とりあえず、そのうちの主な2編を翻訳して、ロマン・ロランを通しての王元化先生への深い友情の記念としたい。年代から言って、「『ジャン・クリストフ』について」は、私たち日本人にとって忘れ得ぬ終戦の年に書かれたものであり、新中国成立以前の時代の良心的な中国インテリのロマン・ロラン論である。「重ねて『ジャン・クリストフ』を読む」は社会主義中国になってからのロマン・ロラン論であり、そのことは現代中国のロマン・ロラン論として読者の注意をひくにちがいない。しかし、どちらの論文も王元化先生のロマン・ロランに対する崇敬の念の深さと熱さを十分に教えてくれるはずだ。

ちなみに王元化先生は「中国文学家辞典」によると、1920年11月30日生まれ、湖北省武昌の人。先生は文学評論とともに小説もかいておられる。かつて上海新文芸出版社の副社長もされ、現在は「中国大百科全書」編集の上海での責任者であり、中国文学芸術界連合会でも責任ある地位におられる。 (1982年 秋)

## 『ジャン・クリストフ』について

王 元 化

私は深く信じているのだが、私の子供や孫たちがロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を読むとき、必ずや崇敬の念をもって作者の心と頭脳とそして彼の人類に対する揺るがぬ愛を賛嘆することだろう。

— ゴーリキー『本』 —

……私のはじめてこの本を読んだのは四年前のことであった。そのころのことを私ははっきり覚えている。私は朝早く起きるとうす暗い二階部屋でこの英雄の伝記を読んでいた。窓の外には低く垂れた灰色の雲塊が見え、冷えびえとした天気だった。しかし私は手足がごえてしびれているのも忘れていた。私の眼前にはひとつのすみきった温かい世界がひらけ、私はクリストフの後について壮大な戦いを経めぐり、彼といっしょにけわしく上り下がりする、苦しい人生の山脈を越えていった。私は彼のことを、天から善なる火を盗み取ってきてこの暗黒の世を照らしたプロメシウスと同じく、神だとみなしていた。彼は、商人的な投機家が成功の保証を得てから手を出すように、行動の前にあらかじめ成功の希望を見つけておくようなことはしなかった。彼は成功のためにはなく、信仰のために出かけて行って戦ったのである。この世間知らずのおとな子供が拙劣な言葉遣いで狭くくしく小さな町を批判し、油垢にまみれきった芸術界を批判し、先のことが見えず庸俗な小市民を批判して、残酷な嘲笑と愚弄を受けたとき、私は彼の不幸な境遇のために同情の涙を流した。このとき彼のすべての友人は姿を消してしまい、最後には、力強くけがれのない友情で、困難なときに彼を助けてくれたことのある、そして彼が今いちばん求めている、親愛なゴットフリート叔父さんも死んでしまって永久に帰ってくることはなくなっていた。彼をとりかこむものは敵意を含んだまなざしだけであり、その人たちは彼が墮落して彼らと同じように平凡庸俗になることを望んでいた。しかしクリストフは答えた：

彼らが私のことをどう言おうと、どう書こうと、どう考えようと、彼らの勝手だ。彼らはどうしたって私が私の本来の面目を保つことをおしとどめることなどではしないのだ。彼らの芸術も思想も私となんの関係もありはしない。私はすべて否認する。 (中国語よりの重訳)

このように英雄的な心は私をどれほど鼓舞したことか。当時、上海は敵(訳注：日本侵略軍をさす)の手に支配され、戒厳、封鎖、屈辱、思想的抑圧のために多くの人たちがすっかり意気沮喪の状態に落ちこんでいた。しかし私はクリストフの観

難な歷程を認識してからは、彼がこんなに不幸な境遇のなかにあってもいささかの動揺もせず自らの旅路をつき進み、初めから終りまで自分の遠大な理想を手放さず、なにも彼も彼の果敢な気迫をおしとどめることができなかつたことを知った。「このような手本の前では、誰にも怨む権利はない」。彼の痛苦に比べれば、ちっぽけな苦悩など、まるでなんでもないことなのだ。私は信ずる、クリストフは私に人間としての、生活に対する確信をあたえてくれたばかりでなく、他の若者たちの中にも彼のあの巨人のような手による援助のおかげで、零落しないですんだ者もきっとたくさんいるにちがいないことを。すべてこの書を読んだ人は永遠にクリストフの姿を心の中からぬぐいさることができない。あなたがたが誠実と虚偽の間をゆれ動くとき、あなたの人生に対する、芸術に対する信仰の火が今にも消えそうになったとき、あなたがどちらをむいても頭をうって行きづまり心が暗く気がめいて世俗の虚言に妥協をはかろうとするとき、あなたはきっといつのまにかクリストフのことを思い出している。彼の姿はあなたの心の中にいっそう輝やかしく、はっきりと、そして生き生きと見えてくるだろう……

たしか『ジャン・クリストフ』を読むまえに、私はロマン・ロランの伝記を1冊読んだことがある。その著者は、ロランのこの書における主要な意図はその何人かの登場人物をかりて「ドイツ精神」「フランス精神」「イタリア精神」の融合混流を表現しようとしたのだ、と説いている。この説明は私が『ジャン・クリストフ』を読む興味を半減させた。正直に言えば、このような意図でなにか偉大な作品を書けるものかどうか、私は、実際、疑わしいと思う。文字の詮議のお好きな学者ならそこから抽象的、形而上学的ないくつかの哲理をさがしてあてられるのかもしれないが、しかしそれは現実の人生とはあまりにもかけ離れたものだ。ロマン・ロランは本当にいくつかのヨーロッパ精神の融合を表現しようとしたただけだろうか。ひとつの偉大な魂がこんな抽象的な封印によって閉じこめられるだろうか。私は『ジャン・クリストフ』を読みあげて、それを全く否定する答えを得た。ロマン・ロランの伝記の著者は彼の親友であり、その人の言葉にも信じうるところがないわけではない。しかしひとつには観点がちがうということはあることであり、ふたつにはロランが『ジャン・クリストフ』を書くとき確かにそのような意図をもっていたかも知れないが、

しかし主要な意図ではなかったのかも知れない。同時に私はハイネの言葉、「ひとりの天才の筆は、従来、彼自身よりも偉大であった。それはずっとはるかにその暫時的な目的のむこうにまでひろがっていく」（中国語より重訳）を引用しておきたい。セルヴァンテスが『ドン・キホーテ』を書いた意図は、スペイン政府と教会の武俠小説に対する禁令にとって換えようとしたにすぎなかったのだが、その結果は偉大な典型を創造することになったのである。ロランとセルヴァンテスの芸術に対する態度はおなじくはなかったし、前者が後者とおなじように、偉大な作品を書こうなどと意識していなかったのだ、とは言うことができない。ここでは、狭い意図であつてもときには、偉大な魂の人生に対する抱擁を制限することはできないのだ、ということを証明しただけである。

その次に、私がふしぎに思うのは、外国の多くの批評家も、中国の多くの批評家もおなじなのだが、よくある名作中の人物の“モデル探し”をしたがることである。それで『紅樓夢』を研究する“紅学”の学者は、ほとんど畢生の精力を費して買宝玉（訳注：小説『紅樓夢』中の主人公の名前）は誰がモデルなのかを詮議する。クリストフに対してもおなじで、ある人は彼はベートーヴェンにもとずくといい、ある人はヘンデルだとし、ある人はフウゴオ・ウォルフだと言ひ、……要するにクリストフをほとんどあらゆる著名な音楽の巨匠になぞらえようとする。こんな作品の研究はちょうど料理を食べるときに、なかにどれだけの塩、どれだけの酢、どれだけの醤油を入れたかを見きわめるようなもので、かえつてもとの滋味を見失ってしまう。『ジャン・クリストフ』を読むとき、例の文学ABCのおきまりの調子や文句をかなぐりすてて、自分の素朴な目で読む人だけが原作の精神を会得することができる。

私が読むことのできた小説のなかで、『ジャン・クリストフ』の書き方はもっとも独特である。多くの人たちがこの書の書き方は現実的だろうかと疑いをもっているかも知れない。トルストイ、ゴーゴリ、バルザック、シェイクスピア……私たちはいつも言語、行動、表情などのいわゆる“外在の形象”を使って人物の性格や心理状態を表現したから、現実の輪廓は明確であり、かれらの作品はそのまま一時代の風俗画であつた。だが『ジャン・クリストフ』はそうではない。言いはばかる必要

もないが、この書物の中には芸術法則に合わない書き方さえたくさんある。冗漫、陰鬱な長文の叙述、作者がたえずわりこんできて直接読者に語りかける、など、「外在の形象」は薄弱なのである。しかしこの作品の現実性に対してわれわれはいささかの懐疑ももちえない。なぜなら、ロランは音楽家とおなじく、「物質世界」の領域の中での現実を創造しようとしたのではなくて、「精神世界」の領域の中での現実を創造しようとしたからである。音楽の中の物質世界の現実、輪廓がはっきりしていればいるほど、その品性は逆に低いものとなる。音楽がもし人類の魂、精神、情緒を表現しないで、音声で馬蹄の疾走、虫や鳥の鳴声などを伝達するだけならば、いったいわれわれを感動させることができるだろうか。『ジャン・クリストフ』を、われわれはこのように読むべきなのである。

私は以前、ロマン・ロランの思想について討論をしたいくつかの論文を読んだことがある。批評家の大部分はロランが思想の道の上で初めから終りまで同じであったとしている。しかしかれらはまた自ら気付かぬままに第一次世界大戦をさかいとして、ロランをふたりのちがった人物に分けてしまっている。このような見解をもっとも強く徹底しておしだしたのはロランの同国人であり、またその崇拝者であった批評家のジャン・リシヤール・ブロックである。しかし『ジャン・クリストフ』を読んでから後、私にはブロックの意見に対して根本的な動揺が生まれた。ブロックは言う、

1914年以前の、ロランの理想主義は19世紀フランスの非宗教の3個の柱石、すなわち、「自由、榮譽、祖国」を基礎としていた、と。ブロックはさらに1個の柱石、すなわち、「芸術」をつけ加えた。大戦がやってくると、4個の柱石はつぎつぎにうちくだかれた。

祖国とはなにか。ひとつの嫉妬ぶかい、偏狭な偶像であり、政治と財政の単純な結合の上になげ出された1枚のかけ布団だ。

榮譽とはなにか。ひとつの齷切れよい単語だが、それのおかげで、同一の文明をもつ子らが、同一の動機のために、顔と顔とをつき合わせ、従容として死んでゆく。空っぽの、静止した、利益に支配されている世界に反抗する能力も

ない、ひとつの卑劣な力のことだ。

自由とはなにか。死んでしまった偉大な事物のひとつの残りかすだ。いま、恐れにうちふるえ、平凡で怠惰ないくつかの権力の周囲にしりごみしてしまっているそれは、すでにただ個人主義と自由主義の名前を借りて、恐怖、猜疑、必要な束縛への不服従、などからできあがっている小市民階級の無政府主義に栄養をあたえることしかできなくなっている。

芸術とはなにか。暴君と英雄のためにダンスをしている、くだらない、ひとりの女の子だ。

(以上はすべて中国語よりの重訳)

ブロックのこの言葉は、たしかに深刻に19世紀フランスの非宗教思潮の虚偽を暴露している。しかしもしこの思潮がロランの1914年以前の理想主義を代表していると言うのなら、私はまったく不相当だと思う。『ジャン・クリストフ』こそはひとつの有力な反証である。この書は大戦の前に生まれており、しかもはるか1902年以前に、ロランは執筆に着手していたのである。クリストフは病める理想主義を攻撃しているから、われわれはロランが擁護したのがどの理想主義であったかをはっきり知ることができる。フランスとドイツが戦争をしたときの、クリストフとオリヴィエの対話によって、われわれはロランの祖国に対する見方がどのようなものであったかをはっきりと知ることができる。クリストフのパリの芸術「市場」に対する挑戦は、ロランの芸術観を十分に説明したものと言えないだろうか。クリストフの芸術に対する態度は、疑いもなく、当時の進歩的な傾向のひとつを代表していたのであり、この点を私はかたく信じている。

1945年11月

(相浦 泉 訳)



## かさねて『ジャン・クリストフ』を読む

王 元 化

ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』が『半月評論』紙上に発表されてから、世の中の人間は、ロランを愛する者とロランを憎む者との二つに分かれてしまった。われわれ、『ジャン・クリストフ』の以前の読者もすでにこの選択を終えている。一方の人たちは、ロランを、20世紀黎明期の曙光、一切を圧倒していた当時の卑俗な物質主義や臆病な理想主義と血みどろの戦いを進めた戦士、文学の中から濁りきった腐敗の空気を追い出し、新鮮な血液を輸入し、暗黒を照らし、迷妄をたたき起こした巨人だと見なした。ロランは彼らの「倦まざる友、おだやかだがめざとい心もち、忠実で寛容な通信の相手、多くの失意の者のかくれた顧問」となっていた。……もう一方の人たちは、まさにロランの善に対する追求と悪に対する常に妥協しない態度との故に、まさに彼があれらの英雄伝記、史劇、『ジャン・クリストフ』および武力主義者に最初の致命的な打撃を与えた「戦いを超えて」の宣言のような戦闘的な論文の作者であるが故に、永遠に彼を許すことができないのである。

2度の大戦の火の洗礼といっそう尖鋭になった生死の闘争の試練を経て、先進的な理論に対していっそう明確で深刻な認識をもち、マルクス・レーニン主義を掌握した読者は、今日どのように『ジャン・クリストフ』を見ているのであろうか。現在、この書の価値には新しい変化が起こっているのだろうか。それは以前とおなじように偉大な作用を発揮し、われわれの事業に対して少しでも力を尽くしてくれるのだろうか。それとも害あるのみ、ということにまでなるのだろうか。

「人は人に対して狼ではない」ロランは終始このようなゆるぐことのない信念を抱き、人類が「至善」の境地「に臻る」ことができることを信じていた。これは思想の商標ではなくて、偉大な焰なのであり、それはロランの全人格と全作品の中で燃えている。これは良い感覚をもつていても良い作品は書けないという例の定理に対抗するための重要な根拠のひとつなのである。半世紀以前のフランス文学の中で、『ジャン・クリストフ』よりも早く事実の表現によってこの醜悪な定理に反抗

した作品がほかにあつたらうか。

「人格が偉大でないところに偉人はない。偉大な芸術家も偉大な行為者もない」  
(『ロマン・ロラン全集14』片山敏彦訳より) 1930年、ロランが『ベートヴェンの生涯』の序文に書きつけたこの壮烈な宣言は、靈魂の糞便を反映し、思想の腐臭をまき散らすあれらの作品が文学の中に二度となにひとつ重要な位置を占めることができないようにした。この宣言の価値を知ろうとするのなら、まずわれわれは次のことをはっきりと知っておかねばならない。すべての人たちがすでに領悟しているこの簡単な真理は、当時あってそれを擁護する者ならば一切を顧みることなく墮落した潮流と対抗しなければならなかったし、敵に“異端”と呼ばれることを恐れてはならなかったのだ、ということ。われわれは自分が炬火たいまつを持っているからといって、以前に湿った柴や腐った草に火種をつけて燃え上らせた人のことを嘲笑してはならない。もしさらにロマン・ロランの国を見るならば、今日に到ってもなお、上述の醜悪な定理が、うわべだけをとりつくろった自然主義の中に、そしてあらゆる道徳を否定する新奇ななんとか主義の中に泛濫しているのである。とするならば、『ジャン・クリストフ』というこの精神の里程碑を軽々しくもみだりに押し倒そうと企てたり、生涯を苦闘したロランの偉大な戦績をいとも簡単に抹消したりすることは、もっとも不公平でもっとも無責任な態度であることをさとるべきである。その次に、善の概念は歴史とともに変化するけれども、われわれはロランの善に関する見解にすべての点で同意しないかもしれないけれども、たとえ『ジャン・クリストフ』の服飾が時流にあわず、どんな着かたをすれば人に笑われないですむかを心得ている人に笑われたとしても、たとえ『ジャン・クリストフ』の時代おくれの風格を発見し、部分だけしか見えない人に欠点をほじくり出す機会をあたえることになったとしても、そんなことはかまわない。「それらはすべて細部なのであり」、「この作品をわれわれが重視するにあたいするところは、あの熱い心なのであり、あの偉大な焰なのであり、人間は至善いたに臻ることができるということに対するあの信仰なのであり、善に対するあの確固とした信念なのである」。大切なことはロランの善に対する追求の「性格そのもの」なのである。

ロランは「二度征服された」フランスで育ったのである。

パリ・コムミューンの壊滅と普仏戦争の敗戦によって、フランスの知識分子は非観主義の重荷の下におしひしがれ、文学面では自然主義がはなばなしく勢いをのびていた。その中ではもっとも見識のある人物でさえ、「思想は行動を伴わなくてもよいと考えたにすぎなかった。もっとも芸術に忠実な人でさえ、「虚無を描いた1冊の本」を書きたいと希望したにすぎなかった。もっともよく現実を反映することができた人でさえ、「樹の葉そのものために樹の葉を観察し、自然を理解するには自然と同じように平静でなければならぬ」と宣言したにすぎなかった。もっとも科学的な方法を重視した人でさえ、「獲得できるかぎりの素材を収集し、記録しよう」と主張したにすぎなかった。もっとも反抗精神に富んだ人でさえ、ドレフュース事件によって「一時的に憤激した」にすぎなかった。その他の者は、小市民の現実に対する追従をもって現実の表現に替え、悪い感情を良き感情に替えて創作の基礎としただけのことだった。彼らは熟練した言語を操ってさまざまな冷淡な形象をいかにもそれらしく浮彫りにし、探訪してきた材料を利用して庸俗社会学の図解をかき、純生物学の方法にもとづいて心理試験の記録をつくる………ことができるかもしれない、要するに、彼らは人間の1本づつの頭髪の形状を描くことはできるが、ひとつの平凡な魂の偉大さを書くことはできない。

ロランはほかでもなくこのような一切を呑みつくす潮流の中で自己の文学活動を始めたのである。彼は1890年にマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークに宛てた手紙の中ですでに「生命と才能をすっかり愛情の囲いの中で使いはたす」モウパッサンに対して不満を表明している。彼は言う、「才能とは広々とした芸術の園の中のもう1粒の砂でしかない」、モウパッサンの作品の中に、「われわれがさがしあてるものは芸術でしかなく、その次も芸術であり、芸術を除けばほかにはなにもない………」。

彼と同時代のブルジェに対して、ロランはより大きな反感をあらわにしている。モウパッサンは彼に「絶対的憎悪」を抱かせたけれども、しかし少くとも「モウパッサンを憎んでもよい、なぜなら彼はひとりの人間であり、彼は血も肉もある人間

であり、彼は残酷な性格をもっているけれども——なんといつてもそれはひとつの性格だからだ」。しかし、ブルージェはまるで生きていてのものではない。ロランは言う。

私はブルージェの態度は彼の小説よりもっと嫌いだ。彼のひからびた心理学はあまりにお手軽すぎる——人を耐えがたくさせるだけだ。……私は彼と心理学とはなんの関係もないとさえ感ずる。彼の観察はどのひとつをとつても、講述と発表と解釈でしかない。人たちはブルージェ氏の卒直な、しかし全く無条件の巧妙な自己崇拜を感ずることだろう。彼がひとつの感情世界の細部を分析するたびごとに（そしてあるときなどはめったにないほど深刻なものだったのだが）、彼はまるでアメリカを発見したと考えているかのようだった。そのほか、私は彼の教授風の冷淡さにも耐えられない。彼の描く人物はまるで人間ではなく、幾何学の図形でしかない。私は彼のものを読むと、思わず自分の椅子の上に跳びあがろうとしたり（どうか私を笑わないでください）、あるいは、瓶を1本うち割ろうとしたり（どうか私を笑わないでください）、あるいは、だれか家の者にくっつかかろうとしたり（どうか私を笑わないでください）するのだが、それは私の激しい倦厭と無聊とを緩和させたいためだ。どんなに生活を研究したところで、この小説はまったく死んだものだ。死んだものであるばかりでなく、<sup>から</sup>藁がいっばいつまっているのだ。私の言葉はすこしわかりにくいだろう。しかし私の言う意味ははっきりしている。ああ、こんな作品はいつまでたっても私たちの生活の中の悩みを慰めてはくれないし、なおさら苦痛の中にすこしばかりの甘味をそえてくれるはずもない。

（中国語より重訳）

ロランははじめから、このような文学潮流と真向うから対立した。彼は生気を失ってしまったこのような腐敗の空気をとりはらって、「英雄を再生させ」ようとした。彼は「信仰の悲劇」の中で、「愛があつてこそ他人を理解することができる」と述べている。彼は『英雄の伝記』で、「われわれは生命に対する、人類に対する

信仰をふるいたさせるべきだ」と述べている。当時は、ロマン・ロランのようにおそれ知らぬ大勇者の精神を抱き、血肉の中に熱い愛と憎しみをしみとおらせた人だけが、荆棘と乱石の中に道を開くことができたのである。

ロランは自身を文学の事業に捧げようとした最初の時から、それが苦しい、したたかな戦いであることに気づいていたし、やがては自分にたくさんの深い傷をもたらすであろうことを予感していた。

彼の青年時代はまったく無味乾燥な試験のために犠牲となった。家庭や肉親の期待をうらぎらないために、彼は次々に高等師範学校、学士、研究生……の試験にパスした。これらすべてのやっかいな仕事をやりあげ、上流社会への門が彼にうち開かれたとき、彼はそこへ足を踏み入れることを拒んで、むしろすすんで艱苦の道を選んだのである。彼を深く愛していた師のガブリエル・モノーさえも、彼がこれからその果実を受けようとしている教師生活を放棄したことは「怪卒なふるまい」と考えた。しかし彼は「成功することだけを求め、いちばん安定したいちばん便宜な近道を通して目的に到達するような人間」にはぜったいになるまい、と早くから思いきめていたのである。

このような無名で人に知られていない青年が墮落した文学潮流の全体に向かって挑戦しようなどとするのは、もちろん容易なことではなかった。敵の力は、すべての出版物を占拠し、すべての劇場を壟断し、彼と読者とのすべての通路を遮断してしまうほどに強大であった。そのうえ彼の経済はたえず脅威を受けていたがひとりの有力な友人もいなかった。新聞界でも、出版界でも、劇場方面でも、いささかの同情も得られなかった。彼は1ダースも戯曲を書いたのだが、そのうち8本は印行することができず、上演できたのはほんの数本だけで、しかも幾晩も上演はしていない、たいていはただ1度上演しただけで、なんの評判もなく埋もれてしまった。彼が信頼した親友のかのマルヴィーダだけがこれらの戯曲を推賞してくれたほかは、誰もひとことも言ってくれはしなかった。彼と数人の友人が身銭を切って雑誌を出し、広告も載せず、稿料は1文も受けとらず、だまって15年間もつづけたのである。彼は歴史の銅像ともいべき一連の英雄伝記を書こうとした。彼らの雑誌に発表された『ベートーヴェンの生涯』をはじめとするその他のいくつかの伝記も人た

ちにボロ紙同然に無視された。彼が『ジャン・クリストフ』8巻を発表した後でも、彼は相変らず無名で人に知られなかったし、かえってくる声もなく、反響もなかった。なんども、彼が妥協を表明しさえすれば名声を得られたのだが、彼はいささかの躊躇もなしに誇り高く拒絶した。『ジャン・クリストフ』の「広場の市」の章が発表されてから後は、彼は長くパリ出版界の彼に対する善意を失ったのである。

10年、15年、20年……………彼はずっと孤独と寂寞の中で仕事をつづけた。彼が『ジャン・クリストフ』の中に書きつけた「彼の目的は成功することではなくて、信仰なのである」という言葉は、実はまさに彼自身の写し絵なのである。まったくその通りで、『ジャン・クリストフ』を書いたこの人は、まさにジャン・クリストフと同じように、人間であろうと化物であろうと、古えであろうと今であろうと、すべて前進を阻むものは踏み倒し進むというあの不屈の精神をもっていたし、自分のために退路を残さず、他の人のためにも余地を残さず、敵に出会えば頭を低くして突っこんでいくあの毅力をもっていた。信仰のためには失敗を恐れず、戦いのためには傷を負うことを恐れず、油垢にまみれきった芸術界を洗い清めるためには冷淡にされ、打撃を受け、包囲攻撃されることを恐れなかった。

当時は、彼のように不屈の人だけが、倒れては起き倒れては起きあがって腐敗した文学潮流に向かって孤軍の抗戦をおこなうことができたのである。

「世の中にはばらばらといくつかの石ころがあるわけではない。人類の生きる力はほんとうに失われつくそうとしている」（中国語より重訳、これに該当する部分を見つけ出すことができなかった。あるいは見落しているのかもしれない。ただ「広場の市」p.465 — みすず書房『ロマン・ロラン全集』『ジャン・クリストフ』— に「私たちは一つの壁によってへだてられている。その壁を作り上げている石を、一つまた一つと私は取りのぞく。しかし、同時に私自身を使いへらす。私たちがたがいに、へだてなく結合することはけっしてないのだろうか？……」という文があり、それと関連づけて考えられるかもしれない）

まさに彼はパリの芸術「広場の市」の中でこそ光明と進歩を堅持したのであった。

『ジャン・クリストフ』の第1巻「曙」は1902年に世に問われ、最後の1巻「新しい日」は1912年になって完成した。ロランがこの小説に着手する前にはまるまる10年間の準備の時間が経過している。彼は高等師範学校で勉強中にすでに「ひとりの誠実な芸術家が世界の岩石を打ち砕いた歴史」を書こうとし、1890年、彼はローマのフランス考古学院でジャン・クリストフのいっそう鮮明な風貌を手に入れた。「それは自由の人であり、偉大な確信によって創出されたのである。人類は彼をうち棄てたけれども、彼は人類の中にいてなお確信をもちつづけていた」（中国語より重訳）。

ロランが『ジャン・クリストフ』を書く以前から、ジャン・クリストフの影はずっと彼の心を占めつづけ、彼に圧迫を感じさせたので、どうしてもそれを吐き出さねばならなくなっていた。この小説はどろ細式に社会の片隅へ出かけて行って材料を集めれば書きあげられるようなものではなかった。たとえどんなに偉大な自然主義の作品でも、まことに彼自身の言うように、「かの Fiat Lux!（光あれ!）が欠けている」、なぜなら、「太陽の光明が不足しているから、心の光明があらねばならぬ」。ロランと自然主義作家の最大のちがいはまさにここにある。彼は他の人を感動させる前にまず自分が感動したし、他の人を信じさせる前にまず自分が信じた。彼は偉大な思想を自己の血肉と化し、偉大な理想を自己の行動に滲透させた。信仰の松明<sup>たいまつ</sup>をまず彼自身の心の中に燃えあがらせた。しかし、どれだけ多くの人たちが受け売りのうわべだけを飾る思想と真の血もあり肉もある思想とを同列においていたことか。どれだけ多くの人たちが空威張りの大言壮語を戦闘的大勇主義と一視同仁していたことか。

たとえ1ダース以上の理由があつたとしても、古くさいおきまりの伝統理論によって、『ジャン・クリストフ』の中でしばしば十数ページからときには数十頁さえ占めている直接的叙述を非難し、それは芸術の法則を破っていると言つたとしても、そんなことは関係がないのであり、そのことはこの偉大な作品の一字一画をも損うものではない。このような、芸術に対する去勢ほど真の芸術家を耐えがたくさせるものがほかにあるだろうか。大切なことは、その誠実な心なのであり、その深い感情なのであり、その火のような現実感なのであり、……、それらは永遠にわれ

われと通じているのである。

たしかに、『ジャン・クリストフ』は現在のその読者の社会意識の水準（訳者注：新中国になってからの社会意識の水準をさしている）には追いついていないかもしれない。しかし、われわれは言わなければならない、この「善の勝利を信じていたベートーヴェン」はなおかつあれら「心の参加をもたない社会意識でも、ものごとはすまふことができると思っているような男や女ども」にとって欠くことのできない模範となりうるのだということ。

ある社会意識がもし偉大な品性をその基礎としているのでなければ、人格の印証をその血肉としているのでなければ、心の参加をその生命としているのでなければ、たとえ科学的方法を用いているとふれまわってみても、客観的態度なのだ<sup>と</sup>吹聴してみても、それはどんなにしても自己の冷淡を掩いかくすことができない。このような冷淡の表現は、たとえば、ときにはロランがブルジェの作品の中に見た、例のひからびた心理学であり、まるで人間ではなくて、幾何学の図形のような人物である。またたとえば、ときには、われわれがアプトン・シンクレアの作品に見る、政治経済学を機械的に形象言語に翻訳したような、できの悪い「暴露文学」がそうである。シンクレアは資産階級の罪悪を「暴露」した『屠場』、『石油！』などの作品を書くこともできたが、もっともきたならしい世界主義の賛美詩「二つの世界の間」を書くこともできた。いったい、彼は次々に考えが変わって、革命者と悪党とが同じ魂の土壌から生まれてくるものとも考えていたのだろうか。彼がそれら「暴露文学」の中に表現した、心の参加をもたない社会意識<sup>いつわ</sup>は詐りのものである。これは投機的なもうけをたくらむ商人にはいちばん通りにくい関門なのであり、われわれが本物と偽物とを区別するもっとも重要な試金石なのである。われわれが、シンクレアのこれまでの進歩をよそおった社会意識を、人を欺くものだと見なしたのは、それが「心の参加」に欠けている、という原則にもとづくからである。シンクレアのようにあちらへこちらへとたえずゆれているのは、まさに多くの人たちが言う「転向」という2字にちょうどふさわしい脚注である。もしものごとの見わけ



もせず、よく考えもしないで、「転向」という悪名を、人間は「至善に臻る」ことができると終始信じていた戦士の頭に——彼は初めは時代の制限のために、一挙に個人主義の柵から完全脱出をしなかったけれども、早くから、ある克服しがたい思想を内にもっていて、積極的な民衆をさがしあてたのだ——でたらめに加えるとするれば、そのとりちがえの誤りは、ただ真偽の区別をすることがまるでわかっていなかった結果なのだ。

このようにしてはじめて、『ジャン・クリストフ』の中の弱点と、そして、われわれがなぜこれらの弱点をただ「過渡的な」あるいは「時代遅れの」とだけ言って、「すぐに朽ちてはてる」などという言葉を避けて用いないかという理由を理解できるはずだ。これはわれわれの偏愛や、ロランに対する過度の崇敬によるものではなくて、われわれがこれらの弱点をロランの全基本精神の細部にいささかの傷もつけるものではないと見なしていることによるのである。

ロランは少なからぬ迂余曲折の道を歩いてやっと終点に到達した。しかし初期のロランの形象の中にさえ、われわれは後期のロランの萌芽を見出すことができる。それはちょうど種子の中に未来の植物の生命が含まれているのと同じことである。それとは逆に、シンクレアのような利益をたくらむ投機的商人は、ときには偽装の顔でわれわれの前に現れるかもしれないが、彼らはロランが真に到達した終点に到達することはできないのである。われわれがもし、後の者が先を越す態度や、欠点だけをつつきだす方法をとるならば、『ジャン・クリストフ』を一文の値うちもないほどに「批判」できるだろう。数えきれないほどの証拠を挙げて自分の社会意識がロランよりずっと進歩していることを証明することで驕りたかぶることができるだろう。

かつて、『ジャン・クリストフ』の中から「毒素」をさがし出して、これは「資産階級文学の滅亡直前の輝き」なのだと断定しようと企図した人がいた。こんな言い方の途方もない愚かさ加減はともかくとして、この論者が根拠とした理由もまたきわめて単純薄弱なものであった。その人は『ジャン・クリストフ』を青年に恋愛

のしかたを教える本だと思ったのである。ここでもう一度ロラン自身の言葉を引用して、彼が「生命と才能をすっかり愛情の囲いの中で使いはた」したモウパッサンにどれほどの反感を抱いていたかを証明することが必要だろうか。『ジャン・クリストフ』自身によって、ロランは決して青年に恋愛を教える先生などではなかったことを証明する必要があるか。

「新しい日」の巻は、ジャン・クリストフが永遠に「下層の民衆に別れを告げ」、またもや「愛情」だの「友情」だのという青年期の「貧しい憐れな人生」をくりかえしていることの表現なのだと受けとられている。しかしあるフランスの作家は、「アンナとクリストフのめぐりあいはフランスの小説の中でもっとも偉大な、もっとも単純な、もっとも美しいものの一つだ」と述べているのである。

言うをはばかるまでもなく、今日目で見れば、『ジャン・クリストフ』の中には、「時代遅れ」のものや、「過渡的」なものが存在している。すべてこの小説を読んだことのある者は、たいていクリストフの「民衆蔑視」の印象をぬぐいきれないだろう。しかしその頃、ロランは眠りこけた民衆の革命性を見ることができなかったものであり、これは彼の誤りではなくて、彼の不幸だったのである。

われわれはさらに次のことをはっきりさせておかなければならない。クリストフが憎悪した「大衆」は決して労働大衆などではなく、まさにイブセンが反対した「多数」なのであり、「中産階級のちっぽけな世界」を代表する「多数」でしかなかったものであり、真の労働大衆の多数と同じものではなかったのである。この問題について、エンゲルスはエルンストの機械論を批判している。なぜならエルンストが誤ってイブセンが反対した「多数」を労働大衆だと考えたからである。クリストフが憎悪した「民衆」とは、パリの「広場の市」に浮き沈みする残滓でしかなかったし、小都市の中で「噂ほどこわいものはない」ことを武器とする小市民たちでしかなく、また、音楽ホールや歌劇劇場でベートーヴェンを使って1、2時間の無聊な光陰をすごし、ひどい哄笑とヤジでひとりの誠実な音楽の天才を侮辱した聴衆でしかなかったのである。クリストフ、この不屈の芸術家は「流行の、病める、空虚な芸術」

に反抗するために、大胆に立ち上ってこれらの「民衆」に挑戦したのであり、その時、この地で、勇気をもってそうした者はほかには誰もいなかったのである。なぜなら当時、もしロラン自身の言葉をかりるなら、「『多数』を——観衆の数や収入額の数字を崇めまつる宗教が、こんな商業主義のデモクラシーの芸術思想を支配していた。作者の例に見ならって批評家たちが唯々諾々として、芸術作品のたいせつな役目は、観衆や読者に気に入られることにあると主張していた。成功こそ掟である。そして成功が長つづきするようなら、この事実には頭を下げなければならない。そんなわけで、彼らは娯楽至上主義の「株式相場」の変動に見込みをつけることに専心し、一般大衆が作品についても感想を大衆の顔色から読み取ることに大わらわであった」（片山敏彦訳「広場の市」p 366 —みすず書房『ロマン・ロラン全集』Ⅱ）からなのである。

まことにロランが言うように、「このように卑怯な時代の中で、誰がものごとをやる勇気があるか。誰がすんで責任をとるために自己を地獄に落とし入れようか」。もしそうならば、この真理を追求し進歩を堅持して自己犠牲の戦いをつづけるジャン・クリストフをニーチェ式の超人だとか、あるいは、真に民衆を軽蔑するものだとかと言うことができるだろうか。もしそんなことが言えるのなら、当時の「数字を崇めまつる」あの奴隷どもは、みな真に民衆に接近した人物になってしまうのではなかろうか。

「民衆蔑視」と目されている『ジャン・クリストフ』の発表よりはるか前に、ロランは「民衆劇場」の運動を始め、芸術を民衆にとりもどし、民衆の力によって芸術を救おうと企図し、そして次のように宣言した。

卒直に話そう！ 塗りたてたり飾りたてたりしないで話そう！ 他の人に理解されるように話そう！ ひとむれの利巧な人たちに理解されるのではなくて、何千何万の人たちに理解され、純朴な人たちに理解され、身分の低い人に理解され、……

もしロランが『ジャン・クリストフ』の中で「民衆を蔑視」したと言うのなら、

それは大衆化問題には、凡庸の原則に対する勝利と原則の凡庸に対する勝利の区別、自然性の自覚性に対する勝利と自覚性の自然性に対する勝利の区別、が存在することを理解していないからである。ロランがパリの「広場の市」の民衆に反抗したのも、まさにこの原則性と自覚性を堅持するための戦いだったのである。

しかし、クリストフは「燃え立つ茂み」の中でも下層の民衆——「広場の市」の民衆とはまったくちがった別な世界とも接触している。この「稲妻のような地獄への旅」は、ロランが10巻の『ジャン・クリストフ』の中で下層の民衆に接触した唯一の機会であった。オリヴィエの死をもたらしたメーデーのデモにすぐつづいて、クリストフはまた下層の民衆のそばから離れ去るのである。まことに、ロランの筆になるこれらの下層の民衆は「頭が千もある動物」のようにうごめき、叫び狂い、怒りたけり、……………して、彼らの顔つきも「はっきりしない」ものではある。しかしもしわれわれが、ロランによって「直接、民衆の中からやって来て、力強く、がっしりとしている」と称されたゴーリキーを読んでも、その初期には、把握していた不屈の性格もお完全に目醒めた労働者階級ではなくてただの流れ者だったのである。とすれば、ロランに対してどうして過分の苛酷な要求をもち出すことができよう。ましてロランはデモをしている民衆に対して、目まいのような感乱を感じただけで、彼らに対して軽蔑などはしていないのである。このことは「広場の市」の中の「身分の低い民衆」に対する彼の態度と根本的にちがうものである。

1900年、ロランは「民衆劇論」の中で、彼がさがしあてたものは、「自由思想の民衆であり、物質的必要や苦しい労役にいためつけられていない民衆であり、偏見と宗教的迷信に欺かれていない民衆であり、主人としてある民衆」である、と述べている。

このように健康で積極的な民衆は、もとより「広場の市」には見つからないが、「燃え立つ茂み」の中でも、「人類の力がまだ人民の勝利によって新たに形成されなおしていない」時には、その盲目的で、いまだ目醒めぬ力を見ることしかできないのである。ロランは積極的な民衆をさがしあててはいないけれども、彼は「主人としてある民衆」の輝やかなしい理想のために最後まで奮闘しようと誓ったのである。

この一点だけをとっても、この偉大な精神の戦士の理想主義と犬儒の者どもの臆病な理想主義とを区別しなければならぬ。彼自身もこのように述べたことがある、「私が『理想主義の毒菓』を嘲笑するのは、真の理想主義にかわって復讐するためである」と。

ロランは言う。彼は30年の歷程の中で、このような積極的な民衆をさがしあてるために自身のひげ根を黒土に埋めこみ、ついにゴリキのひげ根にぶつかり、そして兄弟のように結びあったのだ。彼はソ連人民にあてた手紙の中で、

君たちの戦いは君たち自身のためばかりでなく、われわれのためにも戦ったのだ。君たちはみんなのために戦ったのだ。

と書いている。

しかし、なかには、これは、ロランが武装解除の投降と同じく突然の転向をしたのだ、と言う人もある。なぜなら、ロランは『ジャン・クリストフ』の中で激しく「社会主義」を批判し、ことに例の「社会党员」に対してまったく軽蔑する態度をとったからである。このような主張に対しては、『ジャン・クリストフ』の中のルッサンを代表とする「社会主義者」の連中がいったいどんな人物であったか、をまず明らかにしておく必要がある。これらの人物がいささかも労働階級を代表できないことはまことにはっきりしている。ましてその中にはバリ社交界の寵児、リュシアンまでも含まれているのだからなおさらである。ロランが彼のことを「社会主義のうじ虫」と斥けたのは別に行きすぎではなかったのである。なぜなら、クリストフは当時の「社会主義の宣伝物」に、リュシアン流の「芸術のために芸術する小文人、貴族的無政府主義者」が充満しているのを見たからである。「彼らは地位があるだけでは足りず、さらに榮譽を求めた……社会主義の閑僚も叙勲を受けることは慶賀すべきことだと承認した」からである。

ロランは遠慮会釈なく、「彼らはまるで社会主義など信仰してはいないのだ」と言った。これは正確な見解ではないだろうか。これら第2インターナショナルの社会党员の「社会主義」なるものが何であったか、は今ではみんながすでに十分よく

知っているところである。

われわれはさらに歴史上の証拠を徴して、彼らがマルクス主義を歪曲し、それがレーニンのふたたび新しいインターナショナルを組織する原因となったことを証明する必要があるだろうか。ロランがもしこのような「社会主義」を非情に唾棄しなかったのならば、真の社会主義に対して歓呼することは絶対に不可能であつたらう。

「ロランの時代がわからなければ、彼の作品を理解することはできない」、ツヴァイクが『ロマン・ロラン』の中で述べたこの簡単な言葉はたしかに重要な指摘である。もしロランの時代および彼のまわりの具体的な環境を忘れるなら、継承であろうと、発揚であろうと、批判であろうと、否定であろうと、すべて問題にならない。

あるフランスの作家が、『ジャン・クリストフ』の中の「ふしぎな矛盾」、つまり、その中のある場合の、叙述の手法であると同時に思想方法でもあるような観念論のことを指摘している。しかし、なぜこれらはただ「過渡的な」あるいは「時代遅れの」ものにすぎず、「すみやかに朽ちはてる」部分の方がより多いという見解をとりえないのか。それは「単独の建築物のドアのノブはぜったいに建築物全体を代表できない」からなのである。われわれは『ジャン・クリストフ』の個別の弱点によってその全体を掩いかくすことはできない。それはちょうどただ単に完全な1本の歯によって、からだじゅうに膿傷のある病人を健康だと見なしえないのと同じことである。

1950年6月15日

(相浦 泉 訳)

## マルヴィーダとロランの往復書簡（補3）

### 1 ロランからマルヴィーダへ

ボローニャにて

1890年7月13日、日曜日の夕

目が疲れるようでしたら、この手紙はお読みにならないで下さい。ここには面白いことは何も書いてありませんから。

したい友、鉛筆で書くことを、また、この一週間お便りしなかったことをお許し下さい。あまり多くのものを見て回ったために、もうへとへとです。私の旅がはじめ考えていたほど長く続かないのは幸いです。この上さらにヴェネチア、パドヴァ、そのほか何もかも見物しなければならないのなら、たぶん私は重荷に耐えかねて倒れるでしょう。しかし予定より早くパリに戻るのは、故意にはありません。これは誓います。およそ実際のセンスに縁のない私は、旅行に出た途端、小包代に4日分の費用を払うというへまをやりました。どうしてそうなったか打ち明ける訳にはゆきません。まことにお恥ずかしい話です。こんな馬鹿なことを仕出かした自分に腹を立てる気にならないのは幸いです。今度のことを自分に悪く取る気は毛頭ありません。他人についても同様です（このほうがもっと立派です）。むしろ笑ってきます。要するに私は素敵な小旅行をしたことになるでしょう。それは短期間であるだけに、かえって、いっそう有益でしょう。非常にまとまりがあります。これもひとえに偶然のおかげです。そのために私はピエロ・デルラ・フランチェスコ<sup>1)</sup>の作品をほとんど全部知ることができました。それに彼の流派、弟子のシニョレルリ<sup>2)</sup>、友人のメロッツォ・ダ・フォルリも<sup>3)</sup>。

ピエロは立派な画家です。あなたもご存知の、「繊細なもの」にたいする私の気分のために、私は彼の芸術を感じるのには二重に鋭敏でした。繊細さと優雅さを怪んじ、真実と力——とくに真実——を旨とする画家にとうとう出会ったのです。彼の主要な作品はボルゴ・サン・セポルクロにある画ではなく、アレツォのフレスコ壁画だと思えます。私ははじめ驚愕で、つづいて賛嘆の念でいっぱいになりました。

た。15世紀にこのような自然の力をもっているのは、他にギルランダイオだけです。ピエロはもっと単純で、その悲劇性はただただ人生観察から来ています。たとえば、戦闘の凄惨な場面を細部にいたるまで、いささかの誇張もなく描いてゆく彼の無感情は恐るべきものです。観察におけるこれと同じ無感情、卓越した没個性は、時としてシニョレルリにもみられます。これらの魂は愛について多くを知りません。シニョレルリは少なくとも激しい憎悪を知っています。しかしピエロは愛することも憎むこともないように思えます。彼はただ見るのです。そして彼の異常な目は華麗な衣裳のすべて（彼は驚嘆すべき服装画家です）を貫いて、人間の利己的な心まで達します。断言できますが、ミサ服をまとい、大きな平たい帽子をかぶった老ソロモンを見て、私は微笑する気にはまるでなりません。或は、誇らしげな処女の上に、微笑しながら神聖な種を撒く父なる神についても同じでした。すべてが生氣に溢れ、そのため描写と創意の素朴さはすっかり後退します。見る者もまたこの生氣に満たされ、胸いっぱい呼吸するような感じがします。その上、いまだ修理されたことのないこの壁画は、色彩の比類のない新鮮さを保っているように思います。事実ピエロはあの頃の色彩派の最初の一人でした。もしお望みでしたら、いつかまたボルゴ・サン・セポルクロの「復活」についてお話ししましょう。これは何と素敵な土地でしょう！ 自然と芸術が互いに手をさし伸べています。私が唯一の外国人でした。この平和な小村ボルゴ・サン・セポルクロがこれから先ずつと無垢のままでありますように！

長いお便りをする暇と元気がありません。しかし次の機会に埋め合わせをいたします。

一言だけ——シニョレルリの見事な作を所有するコルトーナを見ました。アレツォ、ボルゴ・サン・セポレロ、シッタ・ディ・カステロ——ウルビーノ、リミニ——フォルリ——そして私の美術の旅の仕上げに完璧な美の印象を味わうべく、さらに当地へやって来ました——ラファエルロの「聖チエチーリア」を見るために。これで終わりです。

さようなら、したしい友、心からあなたを愛します。

R. R.



この乱筆をお許し下さい。目が疲れるようでしたら、どうか判読なさらないように。いずれ何もかも話し合えるのでから。

#### 訳注

- 1) Piello della Francesca (1410/20-92) アレッツォ近郊の小村ボルゴ・サン・セポルクロに生まれ、同地で没す。いわゆる「ウンブリア派」を代表する巨匠で、アレッツォの聖フランチェスコ寺院に壮大な「聖十字架の伝説」(1452-66)のフレスコ壁画を、またボルゴ・サン・セポルクロに「キリストの復活」を残した。遠近法(透視画法)の完成者としても知られる。
- 2) Luca Signorelli (1440/50-1523) アレッツォ南東の小都市コルトーナに生まれ、同地で没す。
- 3) Mellozo da Forli (1438-94) フォルリに生まれ、同地で没す。

## Ⅱ マルヴィーダからロランへ

エムス、ホテル「ロンドン」にて

1890年7月18日

したい友、ボローニャからのお手紙で安心しました。ありそうでないにしても、それでも万一といった事で、私は早くもあれこれ想像力を働かしていたのです。次の冬には私たちに共通の仕事がまた一つできたことを大変うれしく思います。実<sup>ス</sup>際<sup>ス</sup>的<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>こ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>での練習です。私は实际的にすぎる人間はそれほど好きではありません。しかしあなたは实际的でなさすぎるようです。あれはローマのことでしたが、代金を支払った際、あなたは釣銭を確かめもしないのです。こっさり白状しますが、私もこういうことでは強くありません。しかし私は「自己教育」(self-education)でかなり満足のゆくところまで来ました。そのおかげで自分のお金をもっと有効に使えるのですから、これは望ましいことです。

最近いただいた数通のお手紙はとても楽しいでした。というのは、あなたの上機

嫌が表われているからです。あなたの陽気で皮肉な一面をこれまで知らなかったの  
で、しばしば笑わずにはおれませんでした。この最後の旅行は素晴らしいものであ  
り、それとして完璧であったにちがひありません。あなたが旅行の継続を妨げられ  
たのは好都合でした。ことにヴェネチアは切り離して楽しむ必要がありますから。  
ふたり一緒に見物できたなら！ あなたが初めて大運河(Canal Grande)をゴン  
ドラで行くのを共にすること——それは運命にいつか恵んでもらいたい一つの美し  
い瞬間です。あなたがピエロ・デルラ・フランチェスカについて言われることは何  
もかも非常に興味ぶかいです。ともかくアレッツォで見てみるようにします。ソロ  
モンアムンの衣文についても、また、天上の窓から下をのぞく父なる神についても、あな  
たが笑わなかったのは理解できます。私自身これらを笑ったのは、純粹な喜びから  
です。素朴さの中のこの真面目さは私には素敵だと思えたのです。しかし繊細さと  
優雅さがどうして真実から排除されなければならないのですか？ 繊細さと優雅さ  
は現実に存在するのではありませんか？ それらは美しい魂の奥底に——力とエネ  
ルギーとまったく同様に——生きているのではないのでしょうか？ ボローニャでは  
聖チェチーリア礼拝堂(ラファエルロの「聖チェチーリア」ではありません)をご  
覧になったでしょうね？ フランチアとコスタによる Fresco 壁画——とくに「聖  
チェチーリアの婚礼」——のある礼拝堂です。<sup>1)</sup>この完璧な "gentilezza" [繊細、  
優雅] もまた一つの真実ではないのでしょうか？

(——) 要するに、あなたがイタリアで夏をたっぷり味わわれたこと、あな  
たが「優美なもの」の他に、ピエロと彼の弟子たちにおいて、真実の力強い表現、  
それどころか峻厳な表現にも出会われたことを嬉しく思います。ご機嫌よう。あな  
たをやさしく——いや誠実に愛します。あなたは「やさしいもの」は嫌いなのです  
から、やさしく……ではお困りでしょう。

お母さまとお妹さんによろしく。

## 訳 注

1) 「ユニテ」14, p. 28の注2) 参照。

### Ⅲ ロランからマルヴィーダへ

パリ、ミシュレ街13  
1890年7月18日、金曜日

したい友、パリに戻って来ました。そしてまた肉親の愛情に包まれています。しかし私のパリ——私がかつて熱愛し、賛嘆したパリに再会することはできませんでした。(——) 昨晚バルコニーでじっと私の星を観察しました。ああ、おっしゃった通りです——星は何と色あせ、ここでは空は何と私たちから遠いことでしょう。——私がかつて生きてきた詩の世界は終わりました。あの南方でと同じ文体で創作をつづけることは決してできません。ここでは嘲りと怒りに圧倒される自分を感じます。——この一年はほんとうに素晴らしいでした。今ではそれを体験したことが信じられない位です。したい友、私の心は深い憂愁にとざされています。

パリのほうは魅力を失いましたが、その魅力を山々が私のために十分とっておいてくれました。汽車がゴットハルトの山を越えた時、私は感激しました。これは重要なことです。というのは、イタリア側で私がかつて印象は優雅なものばかりでした。窓外の湖は私の気分を晴れやかにしてくれました。——それは魂の微笑といった感じです。しかしやがて汽車がゴットハルトへ入り、私がかつての巨大な山塊——さながら永遠にそそり立つ、この途方もなく巨大なものに囲まれ、行為の世界をはぐくんでいる、この靈氣に包まれるのを感じた時、私はほんとうに幸福を味わい、魂の広がるのを覚えました。愛するカンパーニヤの野とおだやかなアルバーノの丘は、澄んだ心に理想的な平和を恵んでくれます。ところが高い山々では、私は闘争に必要な力と気高い怒りを汲むのです。

ボローニヤの「聖チェチーリア」には期待したほど魅惑されませんでした。「バルナスのアポロ」のほうはずっと好きです。卒直に申して彩色はそれほど気に入りません。ことに5人の人物<sup>1)</sup>の背景をなす、ざらつく空がそうです。ついでながら聖パウロの憂うつな夢みるような表情と、かすかな官能をあらわすマグダレーナの微笑は大好きです。あなたのところで見た記憶のある、ティモテオ・デルレ・ヴィーテ<sup>2)</sup>のうるわしいマグダレーナにこの地で再会したことは大変な喜びです。この

柔和で優雅な顔にどれほど深く引きつけられるか、それをお話することは全くできません。ポローニャ派の画家に親しむことはまるで不可能です——17世紀の素朴な画家たちも、また折衷的な画家たちもどちらも。彼らはみな大変器用で、教養があり、勤勉で、実直ですが、少しも芸術的なところがありません。彼らはかなり柔和で、まことに有徳ですが、感情面では大いに平凡で、ひじょうに冷淡です。ああ、そして何とブルジョワ的でしょう！そしてブルジョワ的な芸術は私はまったく好きになれません。しかし反対に、これまで嫌いだったグイド・レーニ<sup>3)</sup>をポローニャで高く買うようになりました。彼のなかに真面目で悟性的な才能があるのが分かりました。その構図は見事です。もう少しで真の芸術家という印象を与えます。しかしそれでも私に確信させることはできません。ローマで嫌いではなかったドメニキーノ<sup>4)</sup>はここポローニャでは没趣味に思えます。——古い画匠たちはどうかと言えば、フランチアがベルジーノと比較されるのには腹が立ちます。第一、フランチアは画家として、色彩家としてベルジーノとは随分ちがっています。それから彼の人はずっと単純で、よい意味でも悪い意味でも正直です（そうです、正直には悪い意味もあるのです！）。ベルジーノには——フランチアもそうですが——情熱が欠けています。しかし彼は洗練された官能を少しばかりもっています。そしてそれが、一般に繊細なものに、（フランチアのブルジョワ的な魂に宿っている）平凡な甘さが混ざるのを防いでいます。ベルジーノは作画的です。しかし決して因襲的ではありません。これら二つの欠点のうち最初のほうが私には好ましいです。ポローニャの美術館にはベルジーノの画が一枚あって、隣に掛かっているフランチアの何枚かの画を楽しむことをすっかり不可能にしまいました。この画はラファエロにとっても危険な隣人のように思えました。——くり返して申しますが、全体としてポローニャの画家には芸術家をなすところの主要な特質が一つ欠けているように思えます。それは繊細な感受能力、深い印象能力、ゆたかな感覚生活ないし感情生活といったものです。それにたいし彼らのもつ能力はよく均斉がとれています。彼らは健全な判断力をみせます。そして彼らの勤勉な努力がすべて証明するのは、けっきょく、“nascantur poetae”〔詩人は天性のもの〕ということです。私は聖チエーリエ礼拝堂を見ました。全体としてとても魅力的です。優雅な人物たち、堅

さのない身振り、うるわしい風景はよく調和します。しかし奇麗で繊細な花の咲くこの花壇から私は何も摘まないでしょう。実際、そこに咲いているものは、どれ一つほんとうに訴えて来るものがないのです。もう少し高揚を、もう少し力を！ 繊細なものは力の微笑として表現された場合、いっそう魅力を増すのではないのでしょうか？ レオナルド [ダ・ヴィンチ] 万歳！ ラファエルロ万歳！ 彼らはれっきとした男性です。しかも幾分か女性的な感情をもった男性です！

パリに戻ってまた私の楽譜を探し出し、そして留守中に私のために買ってきてあった、ラモアの『イポリットとアリシ』のスコアを丹念に読みなおしました。したい友、この作品には見事な箇所があります。いくつかの真に崇高な場面、『魔笛』の祭司たちの合唱を思わせる運命の女神たちの三重唱、グルックのいちばん美しいアリアにも劣らず美しいいくつかのアリア、ワグナーふうの重厚な叙唱<sup>レングマイブ</sup>。18世紀のあの繊細な、メランコリックな魅力は言うに及ばずです。あなたがいくつかの箇所には驚嘆されることを確信しています。この作品はフランス音楽のなかで比類のない地位を占めるものです。私はラモアの全作品を手に入れるでしょう。ところで、私はこれらの作品を弾いたことがありますので、よく知っています。しかし2年前にすでに感嘆したものを、今はもっともっと素晴らしいと思います。

(―――) 数日中にモノー夫妻を訪ねたいと思います。そこであなたにもお会いできるのではないのでしょうか？ さようなら、したい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

#### 訳 注

- 1) 聖女を中心に、その右側に聖パウロとヨハネ、左側に聖アウグスティヌスとマグダレーネ。
- 2) Timoteo Vite (Viti) (1464-1523) ラファエルロの最初の師匠。
- 3) Guido Reni (1575-1642) 17世紀ポローニャ派の代表者。
- 4) Domenichino (Domenico Zampieri) (1581-1641)

5) Hippolyte et Aricie (1733)

Ⅳ ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年7月21日、月曜日

(―――) 昨日、シャンゼリゼを凱旋門からチュイルリー庭園のテラスまで、そこから河岸街<sup>ル・ヴァル</sup>を通してルーヴルまで行ったとき、パリとは少しばかり和解しました。要するに、ルーヴルのようなものはパリにしかないのです。これは芸術に捧げられた最も光栄ある宮殿です。私の知っている美術館で、これほど大規模な、すべてを網羅するコレクションをもつものは他にありません。しかしまさにそのためルーヴルには、イタリアの愛すべき小さな美術館がもつ魅力が欠けています。これらの美術館の一つ、一つが、もっとも固有の風土の不思議な働きによってのみ開化しえた絵画の精粋を秘めているのです。とくにベルギーノやフランチアといった「花のように繊細な」芸術家たちは、この壮大な美術品倉庫のデモクラティックな混沌のなかで、私には困窮した流刑人のように思えます。これに反し、その時代に、その祖国で、生涯孤独であった真の天才は、ここでは勝利者として登場します。レンブラントがここルーヴルではいかに堂々としているか、それをお話することは全くできません。ほかのどの地でも——ハグでもアムステルダムでも、レンブラントがこれほど卓越した力という印象を私に与えてくれたことはありません。何という想像力、何という詩でしょう。そして何と偽りのない深い感情！ ルーヴルの他のいかなる画家も、私にとってこれほど身近かな存在ではありません——レオナルド・ダ・ヴィンチ(ヴィンチの発音にご注意!)<sup>1)</sup>できえも。そして小さな声で白状せねばなりません(他にはおっしゃらないで下さい)——この前レオナルドを訪れたとき、彼には失望したのです。ああ、何という気取りでしょう！ 以前この不思議な微笑がわざとらしく思えたことは一度もありませんでした。私のレオナルドはどうなったのでしょうか。今では思えるのです——この人物はいつもサロンにいて、心にもない世辞をいっていたかのように。ああ、何というへつらい！——したい

友、いまレオナルドの魂にたいし私を閉ざしてしまうのは、優雅さに逆らう、私のいつもの「荒々しい」気分だとはお考えにならないで下さい。いや近頃、私は少しばかり嘲笑的になり、逆説的なことを申しました（これは時々あります）。私は繊細なものを軽んじました。しかし繊細なもののためには、ありとあらゆる力を捧げるでしょう。これは間違いないことです。しかし時折他人を、そして自分自身をもからかいたくなるのです。——しかしどうして以前の私のレオナルドを見出せなかったのでしょうか。（ジョコンダ [モナ・リザ] だけですが、これももう偉大とは思えません。）その代わりにラファエロのたくさんの画が理解できるようになりました。そしてその最小のもの——「アポロとマルシユアス」<sup>2)</sup>でさえ、私にとっては一つの啓示でした。この二つの人物の美しい表情には、無数の思想が宿っています。そのデッサン（複製をどこかで見たことがあります）はもっと気に入ります。私はルーヴルにあるイタリアのデッサンをくわしく研究するつもりです。——あなたのジョルジオーネ<sup>3)</sup>を見ました。もちろん立派です。しかし——したい友——あなたがジョルジオーネを好まれるのは、イタリアの太陽にたいするあなたの熱烈な愛と関係があるようです。ルーヴルのすべてのイタリア絵画のうちで、このジョルジオーネがもっとも強烈にイタリアの太陽を映し出しています。まるで南国の空の一部分がほんとうにその中で生きているかのようです。

天気がとても好いからと申し上げて、すぐにパリへ来て下さるよう説得したいものです。しかしそれはひどい嘘をつくことになります。この数日雪模様で、昨日はすっかり凍えました。今日はまた太陽が照っています。しかし哀れなこの天体は長患いから回復したところなのでしょう。とても生気がないので、こちらは驚のような眼で見つめても何ということはありません。

あなたがもう数日、ドイツの森の静寂の中で、平和な観照の生活を送られることを願います。しかし——もしお忘れでしたら——ヴェルサイユの近郊にも美しい森がいくつもあることをご注意しておきます。

さようなら、したい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

## 訳注

- 1) この発音をめぐって二人はその頃からい合っていた(原注による)。
- 2) マルシュアスは半人半獣サテュロスで笛が巧みであった。アポロと競い合い、敗れた彼はアポロに生皮をはがれて死んだ。その血からマルシュアス河が生まれたという。
- 3) Giorgione (ca. 1478-1510) ヴェネチア派の黄金時代を築いたといわれるが、生涯も作品もなお未知のことが多い。

## V ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年7月26日、土曜日の朝

(―――) ルーヴルを訪れない日は一日としてありません。私がつい一週間前から「レンブラント愛好家」になったとはお考えにならないで下さい。これまでも私はいつもそうでした！ オランダ旅行をした頃の私をご存知でしたら、私のいうことをお疑いにはならないでしょう。今でも「夜警」のことを考えますと、かすかな喜びの戦慄をおぼえずにはおれません。それはワグナーの音楽のような印象でした。この光から流れ出る音楽的な力を想像なさることはできません。しかし今の私がレンブラントの愛好家であり、かつ古代ギリシアの崇拜者であるというのは奇妙なことです。私はギリシアの芸術に酔っています。私はギリシアに関する書物やその彫刻の複製で囲まれています。プラトンを読み、アフロディテ [ヴィーナス] や、オリュンピア神殿のメトープ<sup>1)</sup>に見惚れています。ルーヴルではオルフェウスの浮彫りに、ヴェルサイユの公園ではエレクトラとオレステース [群像] の平凡な模造にまた出会いました。私たち二人の愛しているシチリアのギリシア人哲学者たちを学びます。机の上にはヴァチカン宮殿のケレス<sup>2)</sup>像の図があり、それで読書や執筆の最中に目を上げますと、すぐさま彼女の晴れやかな平安に疲れが癒されます。その直接の結果といえ、私が自分の仕事(作品)を恥じることです。それはとても貧弱に見えます。私はそれがこの偉大な女神にもっと相応わしくなるよう努力します。



この崇高な芸術にたいする喜びをあれほど長く私から奪った偏見は、いまの私にはもう不思議ではありません。ルーヴルやヴァチカンの偉大な美術館には何と多くのがらくたがあることでしょう。凡庸さはこの世の人生を支配するだけでは満足せず、さらに不死をも要求するのです。かなりの数の傑作がこの世には存在するというのが大方の意見です。反対に、傑作はごく僅かしか存在しないというのが私の意見です。美術館にある作品の圧倒的多数が真の芸術にとってもつ意義は、芸術史にとってもつ意義をはるかに下回ります。(これら二つの意義は同じではありません。)ことに彫刻の分野では、天才をもたぬ工匠が宮殿の陳列室を満たしています。ローマの美術の殆どすべては私にとって退屈です。そしてギリシアの美術でもすべてが気に入るわけではありません。退廃はまず私の肌<sup>イカダ</sup>に合いません。私が「ラオコオン」の愛好者でないことはご存知です。盛期(黄金時代)の絶対的な大家でも気に入らない例がたくさんあります。ミュロン、スコパス、ポリュクレイトス<sup>3)</sup>はそれほど好きではありません。彼らについて僅かしか知られていないことは分かっています。しかし人は自分の知っていることしか話しません。

(―――)<sup>4)</sup> したい友、私に「腹を立て」ないように――少しでも腹を立てないようにと言われるのであれば、それは無理な話です。この不正にたいしては私は反抗します。時折「腹を立てる」ことを許して下さい。さもないと……、さもないと――残念なことです――私はあなたに服従を拒まざるをえないでしょう。私がどれほど古代の彫刻に沈潜しているといっても、私の魂はまだギリシアの大理石にはなっておりません。そして決してなりはしないでしょう。いいえ、どうか私が朗らかで悲しくあり、高揚して落胆するのを許して下さいねばなりません。夢中になる時も軽蔑する時も、私のすべての感情はいつも一樣に素朴なのです。これは断言できます。しかし私のいうことを正しく理解していただきたいのです――自分の考えていることを何もかも言わない場合があっても、それは相手にたいする信頼の欠如でも、誠実の欠如でもありません。ただ、言うことはすべて真実でなければなりません。そしてこれは良き趣味と古代ギリシア芸術の掟でもあるのです。アガメムノンが娘イフィゲネイアを犠牲にする光景を思い起こして下さい。彫刻家はアガメムノンに外套の裾でもってイフィゲネイアを覆わせています。予期される醜い

苦痛を見せないためにです。もしそれが現われれば、節度のなさによって全体の厳肅な偉大さは損われることでしょう。

私が入をからかう裏には「不機嫌」が潜んでいる、とお考えになる理由を知りたいものです。冗談をいう時の私は、歯痛に苦しみながら、気むずかしく顔をゆがめて作り笑いをする哀れな人間のように見えるでしょうか。もしそれなら不思議です。——しかし忘れていました、いつかの晩以来あなたは疑い深くなっていらっしやるのです。あなたは私の不意打ちが不安なのです。どうしたものでしょう、したいしい友？ ギリシア人の知恵は教えています、「何事にも驚くなかれ！」<sup>5)</sup>と。それでは私たちはギリシア人から芸術の掟も、実際の教訓も、どちらも学びましょう。さようなら、したいしい友。少しばかり冗談をいいましたが気を悪くなさらないで下さい。(――)

心からあなたを愛します。

R. ロラン

#### 訳注

- 1) ドーリア式建築で円柱のなげしにみられる4角の装飾壁画。
- 2) ギリシア神話ではデメテル。農耕をつかさどる大地母神。
- 3) Myron, 前5世紀。Skopas, 前4世紀。Polykleitos, 前5世紀。いずれも古代ギリシア彫刻の巨匠。
- 4) 以下、マルヴィーダの未発表の手紙に関連(原注による)。
- 5) ピュタゴラスはこれを哲学研究の究極目的としたと伝えられる。ラテン語の“Nil admirari”の一句でよく知られている。

---

(原注) 7月29日、マルヴィーダは長期滞在のため、ヴェルサイユの養女オルガ・モノー＝ヘルツェンの家 [ヴィラ・アミエル] に到着した。

---

## Ⅵ マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年7月31日、木曜日

いま庭園に坐っています。大気は暖かく、青空が広がっています。そして私たちは、たった一時間半離れたところにいるのです。それなのに——鉛色の空と雨とちょっと長い距離が私たちを隔てていた時よりも、もっと遠くへあなたが行ってしまったように思えるのは何故でしょう？ 自分では説明できません。しかしそうなのです。私は悲しくなります。しかし我慢しましょう——これまでの人生でよくあったように。あなたに再会できることを私はあれほど楽しみにしていました。しかしあなたの方はさっさと立ち去ろうとするような印象を受けます。ギリシアの大理石〔の冷たさ〕があなたに感染したというのでしょうか、それとも控え目なパリ人がまた顔を出すのでしょうか？ はじめの仮定のほうが私には有難いです。ギリシアの大理石は人間の魂のもっとも美しい感動を人に伝えることができますから。しかしパリ人のほうは!!!——これまでずっと文通がつづいて、口で話すことのちょっとした代わりをしてくれました。これももうお仕舞いでしょうか？ そうでないことを願います。それはあまりに残念です。といっても、あなたはもう殆ど消えてしまったような気がします——まるで夢のように。これが私の運命です！

(——)あなたの花束はまだよく持っています。ご機嫌よう。どこにいらっしても、あなた自身であって下さい。そしてあなたに祝福がありますように。

M. M.

## Ⅶ ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年8月1日、金曜日の朝

したい友、私がこれまでより遠ざかったように見えても、不思議ではありません。私のイデアリスム(idealisme)はそのような気持を十分理解できます。それを共にすることさえあるかも知れません。しかしあなたがその理由を尋ねられるの

は当然のことです。私たちのような大変なイデアリスト (idéaliste) でない人びとには、この気持はもっと分からないでしょう。私は恐ろしいほどイデアリストです。そしてこのことについて私が入知れず考えていることを打ち明けるのは辛いです。感情が高ぶっている時は別として、私は遠くにいる人びとを、すぐ目の前にいる人びとより身近に感じるのです。なぜとってこの人びとの外見は、私にとって彼らの本質を映し出すものではなく、むしろ彼らと私の間に広がるヴェールなのです。ですからどうしても、手紙の中でよりも控え目になるのです。書いている時には考えていることだけが自分の前にあります。しかし話している時には、お互いを隔てる人間的な垣根を感じます(夢中になったり興奮したりする場合は別ですが)。ただ今後は、「あなたの方はさっさと立ち去ろうとするような印象を受けます」といったことは書かないで下さい。私はあなたの邪魔をすること、おそらくあなたを退屈がらせることだけが心配だったので。そして、たとえあなたが「けっして退屈なことなどない」と言われても、私はそれを確信するわけにゆきません。なぜなら、自分にとってさえ退屈なことが度々あって、どうしても他人の重荷になってしまうからです。

この数日は憂うつでした。もしかするとその名残りが少々あるのかも知れません(この手紙にもしかして誇張があっても、それを穏やかに判断していただくために申し上げておきます)。最初気分がよくありませんでした。喉が痛かったのです。それからご承知のとおり精神的な不快がやって来ました。—— 沮喪? メランコリー? 時折私たちの心の憂いと悩みの海から霧のように湧いてくる虚脱感。これと戦うことはできません。成行にまかせるより他ありません。立ち昇る霧がしばらく空中に漂って、それからまた降りるように、時折悲哀が私たちを襲っては、また去ってゆきます。

私自身の憂うつは他の人びとへの気遣い、こまごました厄介な用事でさらに募りました。シュアレスは「フィガロ」紙に渡すようにという依頼と共に、原稿を一つ送って来ました。読んでもよいという許可がありませんでしたので、予めそれに目を通すことなく私はそのとおり計いました。しかし私は感じました—— 私の友人としては、それが自分の良心を満足させるための最後の試みであること、つまり成功

しなかった場合、自分は人生を生き抜くためにあらゆることをやったが、人生のほうは彼を無視した、と将来自分にいえるための最後の試みであることを。ところで最初から、この試みに見込みのないことを殆ど確信していますので、私は彼のために、そして自分のために苦しみました。——それから、私のほうではあまり好感をもっていないのに、先方は私を愛していると主張するいろいろの友人に会わねはなりませんでした。こうして無理をすることがとても辛いです。彼らと縁を切る勇気がほしいのですが、彼らを苦しませるのが心配です（彼らは全然苦しまないかも知れませんが）。

それから、現代芸術と現代生活にとくに強い憎悪をおぼえる日々があります。そうになると何か小説をつつめくり、何か新聞を一つのぞき、何かことばを一つつかまえてだけで十分です。（——）

したい友、この現代生活はことごとく私の怒りをかき立て、嫌悪をいだかせます。どこか山の上に、ひじょうに美しい空の下に、小さな修道院を探して下さい。数は少なくとも見事なギリシアの立像と、パッサ、ベートーヴェンの作品（私のほしい理想的なモーツァルトは現存しません）と、それになお若干のものがあれば、私はさっそく修道士になります。私には、部屋の扉を固く閉し、外界から自分を遮断したシュアレスの気持がわかります（彼はともかく現代芸術を愛していたのです、私はこれを憎みますが）。外出する気が起こらないために、私は——昔のギリシア人がしたように——髪を半分だけ剃ろうと思います。勿論あなたのところへは喜んで出かけます。しかし気持にあるほど頻繁にはお伺いしなくても、それを友情の欠如だとお取りになっては困ります。私が当地ではやや不自由の身であることをお考え下さい。——あなたは私を冷淡だとか、傲慢だとかいって非難なことが時々あります。しかし私は昔も今もそんなに傲慢なところはありません。そうでなければ、あなたにいつも自分の弱点や挫折感を打ち明けたり——いや、打ち明けなくても厭めかしたりはしません。むしろ注意ぶかく自分の中にしまっておくでしょう。あなたがこの私を友人になさったのは間違いでした。ご覧のとおり私はいつも心配をかける友人ですから。

これだけははっきり申しあげられますが、こうして書いているうちに、何とか上

機嫌がもどって来ました。ですから、この手紙を終わりまでお読みになったら、始めの部分はもうお考えにならないで下さい。

私が「もう殆ど消えてしまった——まるで夢のように」というのは何のことですか？ もしそうであればよいのですが！

(——)母があなたとモノー夫人によろしく申しております。

どうかまた近いうちに！

あなたを敬愛する

R. ロラン

### Ⅷ マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年8月2日、土曜日の夕

したい友、木曜日の私の手紙はあなたをいくぶん傷つけたようです。どうか許して下さい。私もあなたと同じでした。私も憂うつに襲われ、現代生活にたいする反感をおぼえました。そしてそのためすべてが暗い光に照らされて見えました。(——)

あなたを友人にしたことを決して悔やみはしません。なぜとって、私はあなたに最も純粋な喜びの時を負っているのですから。そしてあなたが私にかけた心配はあなたの友情が私にもたらした多くの素晴らしいものに比べれば取るに足りません。夕べには最後のバラ色の雲の群れを楽しみましょう——やがて私たちの視界から消えて行くことは分かっていますが。夜になる前にいま一度、私たちに恵まれた理想的な印象を感謝をもって味わいましょう。(——)

ご機嫌よう、したい友！ あなたには少なくともルーヴルがあります！

誠実なる愛をもって

M. マイゼンブーク

## Ⅸ ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年8月7日、木曜日

したい友、先週あなたをあれほど憂うつな気分にした北方に、ふたたび心身ともに慣れられたことと思います。私はとえば、私の晴雨計の上がり下がり規則正しくなりましたので、それを以前ほど強くは感じません。毎日、起床する私には希望が湧き、そして晩には落胆がこれに代わります。しかし毎朝、希望があらたに目覚めますので、私は嘆くことはできません。

数時間でモーパッサンの小説『われらの心』<sup>1)</sup>を読みました。この表題はまさにこの連中にぴったりです。彼らの心の中はこのとおりなのです。そしてこの新しい書物は、愛の無尽蔵の領域の周辺を回るだけの他の多くの書物と並ぶのです。

「溢れんばかりの情熱が近づくのを感じていたマリオルは、それが二人の間で起こりそうにないのを見ると、最初は驚き、なんとなく興奮した。しかしどちらかといえば官能的な愛を事とした彼は、愛撫によって彼女につながれた。」

この告白は誰にでも理解されるでしょう。——モーパッサンは私が彼を知って以来ずっと、愛につきまとうことで生命と才能を磨り潰しています。愛のほうは——掴まらないで——彼の唇から逃げます。ちょうどタンタロスの唇から水が逃げるように——。

ああ、この連中は心ゆくまで、そしてそれに興じられる限り、自分の品位を落とせると思っているのです。彼らは獣性をあからさまに示しても許されると思っ  
ているのです。彼らのいう「男」（たとえばこの小説で、まあ何回出てくるでしょう）です。そして次に気が向くと、健全な人間、高貴な人間を見出そうとします——情熱の豊かさの中に、また、純粹の肉体に宿る、誇らしく明るい魂の力強い生気の中に。しかし自然はそんなことを許しません。

ブドウ酒は最初に詰められた樽の匂いがかんどうしても抜けません。そのように魂もまた、墮落した青年時代の印しを生涯の終わりまで帯びるのです。

この「世紀末」(fin de siècle)が健全な精神の持主に、そして時には墮落した精神の持主にさえも懐かせる反感——意気沮喪した者たちに混じった最も力強い者

にさえみせるベシミズム——彼らが芸術、信仰、愛においてなすところの無力の告白、これら退廃主義者の熱にうかされたような、絶望的な努力（彼らは努力も空しく、情熱と美と生命を求めながら混乱に陥り、結局、奇形を思い付いては生むが、それとも自分もまた一般の無に呑まれます）——。この「世紀末」のすべての苦しみ、すべての醜さは理の当然の当然というより他ありません。禍いなるかな力なき者、禍いなるかな弱者！

さきの小説にもどりますが、文章と構成についての技巧、心理分析、単純性——要するに才能には感心させられます。こういったものを彼らは皆もっています。それ以外に彼らが何を要求するということです。しかし私にとっては、これは芸術という際限のない砂漠で一粒の砂がふえただけのことです。見出されるのは、ただ芸術、芸術、そしてまた芸術です。<sup>2)</sup>私はいつも自問します、「どうして作者 [モーパッサン] はこの作品を書いたのだろうか、またあの作品を書いて他の作品は書かなかったのだろうか？」と。たしかにこの作品には多くの真実がひそんでいます。そしてそれなりに可成りの出来映えです。しかしこの程度の真実性なら他の多くの作品も達成します。これでは私たちは感動しません。彼はこの小説をうまく書いたのですから、もし千年の寿命があれば、もう千だけ他の小説をうまく書くかも知れません。しかし結局、後味はどれもこれもこの小説と同じように気の抜けたものでしょう。私はこの小説を傍へおいて二度とは手にしません。

人間のほうも芸術と同じです。そこには、おびたしい群集がいます。彼らは生きていように見えながら、無常の妖怪の果しない群のように流れ去ります。彼らの存在とはいえば、稀有の人間——真に人間であり、自分の生命を自分で創造した人間——の反映にすぎません。

『ファウスト』の第Ⅱ部でターレスがいいいます、「時代のなかにあつて、有為な人物になるのも結構なことだ。」これにたいしプロテウスは答えます、

つまり君のような男にだな。

それならまだしばらくはもつ。

なにしろ蒼い顔をしてたちまち消える幽霊ばかりいるなかに、



君とはもう何百年このかた顔を合わせているのだからな。<sup>3)</sup>

しかしこれらの幻影の群れで一人増えようが一人減ろうが、それがどうしたというのです。そしてその群れの描き方がうまかろうと、まずかろうと何の意味があるでしょう。反映は何といっても反映にすぎません。

したい友、お許し下さい。いま、長い長い独り言をいったのに気付きました。私は怒っていたのでしょうか。モーパッサンのせいにして下さい。

祖父は今日ニヴェルネ [中部フランス] に出かけます。父のほうはスイス旅行を諦めると思います。間際になってその気がなくなりました。いずれにせよ他の者は当地にとどまります。ではまたすぐお会いできますように。したい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

そしてあなたにも落胆の時があるのですね。一緒に過ごし、分かち合うことでそれを柔らげることができたら……

#### 訳注

- 1) “Notre cœœur” (1890)
- 2) ここにいう「芸術」(art)がむしろ「技巧」を意味することは勿論である。つまり「自然」の反対概念をなす。
- 3) 8333行以下。手塚富雄訳を借用。

#### X マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて  
1890年8月8日、金曜日

したい友、お手紙に感謝します。この手紙であなたはこれまで以上に大切なものになりました。私がほしかったのは、あなたの二言、三言だけでした。ところが

あなたの怒りと、この怒りがあなたに言わせたものは、私たちの人生で意味をもつ、あの神聖な喜びの一つを与えてくれました。どうか、あなたがそんなにも愛する山々の魂のように、いつまでも果敢で、誇り高く、清浄であって下さい！ あなたの言うとおりです—— 創造的な人間だけが問題なのです。幻影は現象世界のさまざまな形をとって消失するがよいのです。これまで一度も魂をもったことのないものは、いわゆる「リアリストたち」の多種多様な眩惑にも拘らず、ほんとうに生きたことはないのです。私はこのことを先日、エムスに向かう途中、ライン河沿いの汽車の中で一つのまづい詩で叙べてみました。最終行がまだ出来ていません。そうでなければお渡しして、もっとよい詩にさせていただいたことでしょう。しかしお手紙がすでにそのような詩になっています。『われらの心』についての評価は私も同じです。私はミュンヘンで読みましたが、結末もまた芸術的でないと思います。ただただやらしいです。昨日モノーがブルジェ<sup>1)</sup>の最近の小説を貸してくれました。数ページ読んだだけですが、これもまた同類であることが分かります。これらの「男たち」は女性を知っていると思い込んでいます。それというのも、現代的という偽りの魅力で塗られても娼婦にすぎない女をいろいろ見たからでしょう。これらの「男たち」がこれらの女をいくら後光で包んでも仕方がありません。そして彼らは大胆にも、これらの例を女性の典型として示すのです。私はこれらの「心」について記事を書くつもりです。ブルジェの書物も『或る女の心』<sup>2)</sup>となっているからです。私はこれらの心を心からいとわしく思います！

(———)

ご機嫌よう！ ではまた近いうちに、したい友！

M. マイゼンブーク

#### 訳 注

- 1) Paul Bourget (1852-1935) この「往復書簡」で何度か問題にされる。
- 2) "Un cœur de femme" (1890)

## Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

パリにて

1890年8月10日、日曜日

(―――)レーンバッハの描いた肖像画<sup>1)</sup>にずっとつきまとわれました。この人物に描かれるのは、私なら不安になります。魂の奥底まで深く見通す視線には恐怖をおぼえます。だからといって私が心の奥深くに何か悪いことを隠しているとはお考えにならないで下さい。それは違います。しかし——私は自分の内面を人に見せたくはないのです。あなたにはお分かりです。あなたはこのことで私を非難なさいました——いつだったか(もうどれ位になるでしょう!)——しかし今はこのような非難をなされる理由はあなたにはありません。何と多くのことをすでにご存知でしょう! それで私が自分の家(自分の魂)を他人の好奇心にたいして閉めても、あなたは鍵をお持ちですから、きっと許して下さいませ。

音楽的小説、音楽的詩作品という芸術形式として私がどんなものかを考えているかお話したことがあるでしょうか? 通常の小説(小説でなく劇でも)の素材は本質的には事件からなっています。つまり一つの「行為」(action)からなるか(フランスの詩作品では古典悲劇から現代小説にいたるまでそうです)、人生を形づくる若干の行為の論理的連鎖からなるか、それとも、絡み合ういくつかの運命からなります(たとえばトルストイの偉大な小説におけるように。——彼の初期の叙述形式のことです)。音楽的小説の素材は感情(sentiment)でなければなりません。それも、可能なかぎりの力に支えられて、普遍的に人間的な姿で発露する感情です。音楽的小説は、今日いわれるような「心理分析」になつてはなりません(これは批評と哲学の仕事であるべきです)。そうではなく、感情をあれこれの現象に託して絶えず新たに生き返らせるのです。その現象というのは、この感情の担い手であるためにのみ存在する人物——つまりこの感情を体現し、それを生きて、それに勝つか敗れるか、そのいずれかのためにのみ存在する人物です。音楽的小説のすべての部分は、この遍在する強力な感情から生まれなければなりません。

交響曲が一つの感情を表現する若干の音に基づいて構成され、この感情が曲の経過のうちにあらゆる方向に発展し、成長し、勝利し——或は敗北するように、音楽

的小説もまた、この小説の魂と本質を規定するところの、一つの感情の自由な開花でなければなりません。[ミケランジェロの]「モーゼ」やベートーヴェンのいくつかのアダージョ楽章のうちに姿をあらわした感情は、芸術の広大な世界では、また別の形をとることも可能です。ただ[芸術家の]能力の問題です。小説家の役割は、疑いもなく、感情という詩的な織物をもっとも見事に展開するための生きた燃り糸をさがすことです。彼はまず何よりもこの感情を底の底まで感じなければならぬでしょう。つまり詩人でなければならぬでしょう。現実世界では感情が完全に自分を発展させるだけの十分な力と時間をもつことは稀です。感情は刻々、日常生活によって制御されるか圧迫されるかします。したがって現実生活の外面を観察するだけでは、いや内面を観察しても、まだまだ十分ではありません。あるべきもの、そして「現実」以上にはるかに現実であるものを自分だけの力で見て、体験できるためには、人は詩人の魂をもたねばなりません。——以上が音楽的小説についての私の考えです。本質的に詩的であること——ここに音楽的小説の魅力と、そして危険があります。愛に奉仕する小説は対話体の<sup>オペ</sup>頌歌になりうるでしょう。[愛にたいする]軽蔑の感情に支配されている小説はディトゥランボス<sup>2)</sup>へ転化します。そこでは叙情的な要素がやがてすべてを満たし、すべてを包むのです。しかし南国のおだやかな青空と神々しい光のように、<sup>小説</sup>詩は理想的な生——ことばの最も真実の意味での生を取りまいて、それを活動させる唯一の雰囲気です。

以上お話したことからお分かりでしょうが、私は——自分でできる限り——この理論をずっと応用しています。それがいつからのことか正確には覚えていませんが——。(昨日、今日のことではありません。このような理論を考えるよりずっと以前のことであるのは確かです。)しかし私はいつも「不安で」、熱が(肉体的にではなく精神的に)あります。私の目の前にある平静なケレスの威厳にみちた視線にも拘らず、晴れやかな平安は私から逃げてゆきます。(夢想していない限り)私は何かの感情に苦しめられます。私を支配する感情が私の描こうとする感情と一致すれば、それは奇跡です。そうでない場合は、待つて腹立ちを押えるより他ありません。私はよくそうします。

(———) あなたのエドワール君<sup>3)</sup>が成功しますように。ほんとうに気の毒

です。私は試験を憎みます——殆どいつも首尾よくパスしましたが。しかし私は病気になるしました。そして私より有能な者が落第したのに私は合格したことを恥じました。しかし世間では内的な価値を外的に証明するものが要るのです。その持ち合わせがあるなら世間に見せてやりましょう。もしないなら——世間はわれわれなしで済まさねばなりません。

ではまた近いうちに、したい友。心からあなたを愛します。

R. ロラン

### 訳 注

- 1) ヴィラ・アミエルには、80年代にレーンバッハがローマで描いたマルヴィーダのパステル肖像画がかかっている。「この小柄な老婦人には賢者の偉大な魂が宿っている。これを私は描かねばならない！」レーンバッハは当時こういった。そして特別の愛情をもってこの肖像画を制作した。(原注。)
- 2) 元来、酒神ディオニユス(バックス)に捧げられた熱狂的な頌歌。
- 3) オルガ・モノー＝ヘルツェンの長男。

### XII マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年8月12日、火曜日

(———)「あなたの家」の鍵を渡して下さったことにたいし、昨日、お礼をいうのを忘れました。私にとっては神聖な宝です。敬虔な心で大切に保管しておきましょう。

あなたの友

M. マイゼンブーク

(南大路 振一訳)

## ユニテの広場

邂逅を経て

寺尾文成

血生腥い小説だろう、という浅はかな予想は、完全に打ち砕かれていた。戦争という特異な状況。その最中であって、無残にも押しつぶされてしまう主人公達の悲劇的な姿を、真実、美しいと思ったことは今でも記憶している。確か、高校に入学した年のことであつたから、もう十年余りも前のことである。

当時の私は、勉学などそっちのけで、手当たり次第に小説を乱読する文学少年(?)であつた。『ピエールとリュース』に出会つたのは全くの偶然であつたとしか言いようがない。ただ、第一次大戦を背景にして描かれた作品である、という予備知識のみをもって、次々と読破していた他の小説と同様に特別強い関心を抱くこともなく、一気に読了したのである。

それから数年、ロマン・ロランという美しい名の響きを覚えてはいても、ついで他の著作をひもとくことはなかつた。本物と見定め確かな一步を踏み出すためには、あの乱読時代が、さらには、ほとんど書物に目を向けることの無かつたその後の数年間、不可欠であつたのかも知れない。今にして思えば、求めるものが何であるかも判然とせぬまま、半ば真剣に、半ば白けた気分で活字を追っていた時期に、一冊の書物によって蒔かれた種は、密かに私の内で発芽の準備を進めていたのだと思う。

週に2冊、3冊と流れ作業の様に読破した書物の大半は、時を経るにつれて片っ端から忘却の彼方に押しやられて行つたが、不思議に『ピエールとリュース』だけは、その幾つかの印象的な情景の故か、脳裏から消え去ることはなかつた。ほとんど再読の習慣を持ち合わせていなかった私が、後年、折に触れ再読、再々読することになったのも、単に短く読み易いというだけの理由からではなく、そこに何かし

ら心引かれるものがあつたからに他ならない。

ほのかに私を魅了し、かすかにではあつたにせよ、確かな痕跡を残したもの。それは、ひとつひとつの場面に織り成された、余りにも純粹で一途な、主人公ふたりの「心」そのものであつた。「生」に対する彼らの謙虚で敬虔な態度は、当時の私に最も欠けていたものであつた。作品に感ずる魅力がロランへの関心にまで及ぶには、さらに数年の年月を要したが、人間性の最も醜悪な所産である戦争と対極的に描かれた、主人公達の純真でけなげな姿は、読み返す度毎に、否が応でも自らの生き様との対比を私に課し、反省を促し続けたのである。

極度に読書量が減少した昨今ではあるが、私がロランを読む姿勢は、詳しく学ぶというよりはむしろ、自らを顧みるための読書であつたような気がするし、今後もそうある様に努めたいと思う。そして、一日一日、一瞬一瞬を、精一杯生きてゆけたら……などと、殊勝にも思うのである。そのためにも、ロランが生涯をかけて残してくれた遺産は、たとえ少しづつであろうとも着実に読み続けて行かねばならない。目まぐるしく過ぎゆく日々にあつても、貴重な読書を継続することによって、自己を見失うことがない様になりたい。絶えず自らに反問し続けることで、真に「生」を生きてゆきたい、との願い故でもある。

社会的大事件のみならず、何げない身のささいな出来事にも、久遠の彼方を見透かす眼を有したロランは、その眼で、一瞬の閃きの内に永遠を見据えていたがために、心の中で清朗な微笑を浮かべることが出来た。繁雑な日常にあつて、熱心とまではいかないまでも、せめて、そうしたロランの誠実な読者のひとりに成り得たら……。この十年を振り返り、そんな願いが沸き起こる今日この頃である。

今日、ロランと共に

織田和夫

情報過多の時代と言われながらも、この頃、私たちの多くは、目先きの欲望に捉われた見方しか出来なくなつてしまつたようだ。《せこい》と言う言葉が流行して

いても、モラルとしてみた、批判的な色あいは薄らいでしまい、ほとんど《それは、私の気に入らない》という程度である。誰もがせこくなって、このまま、私利私欲の追求が、時代の大きな風潮として、認められて行くのだろうか。（見せかけの繁栄と安定の社会の真上には、すでに核戦争の暗雲が立ち込めているのに……。）

けれども今日も、ロマン・ロランは、その読者に、遠くから殆ど恐ろしいような言葉を投げかけてくる。《凡庸な人間が善良でも誠実でもなかったら、何の取り柄があろうか？》（『ゲーテとベートーヴェン』）と。初めてこの言葉に出合った時、私は自分に向かって言われた言葉のように思い、はっ、としたのであった。そうだ！善良であることも、誠実であることも、本当は大へん難しいことである。だが、よく考えてみると、この二つの事だけでも、生活の目標として、努力出来ないようであれば、私は、後に何が残るのだろうか。

毎日、この地球の上では、様々な新しい問題が起っている。一見した時には、歴史とはずいぶん違って見えた出来事も、同じ人間の本性が作り出したこと、なんと共通していることだろう。《よく似た問題について、たしかロランも語っていた筈だ。どの著作の中でだったのだろうか？》と。こうして、その時、ロランが考え、答えたことと、今日の問題とが二重映しとなる。《ロランと私》《私のロラン》は、今日、限りなく重いテーマだ。三十年前に初めて『シャン・クリストフ』で近づいたロラン。その《ロランと私との必然性》が問われ、《私のなかの、ほんもののロラン》が、今、試されようとしているように思えてならない。（いや、私だけではあるまい。かつて、ロランを読み耽った人、また、ロランを説き、語ってきた人、あるいは、ロランの名に関わってきた多くの人においても……。）

＊

この日本のほか、地球上の到る所で、異常気象が起って、そのニュースが毎年のように報道されるようになった。

すでに化石燃料の使用による、大気汚染と酸性の雨は、日本でも体験済みだ。外国では、大寒波・熱波・豪雨そうして早ばつによって穀倉地帯の一部が砂漠化した、との報告もあった。また、熱帯雨林が伐採されて（日本は世界の木材の輸入量の40



%を占め、木材消費第1位だといわれる。)、その後が、焼き畑農地となって森林が減少し、地球上で発生した炭酸ガスが吸収されないで蓄積されて行くと言われる。その結果、地球は、森林という気温の緩衝装置を失って、炭酸ガスの物理作用のために、温室のようになるのだと。生態系への影響も心配されている。

このまま、エネルギー消費の増大と森林の減少が進めば、近い将来、地球全体の温度は数度上昇し、《五十年後くらいには、南極の氷が溶けて海面が数メートル上昇、世界中の陸地が相当水没する》という衝撃的な、学者の指摘さえある。

人類の未来のために、いや、子供たちのためにも《武器を捨てて緑の地球を守ろう!》と心から思う。

一方、この私たちの社会の中では、多くの親が真剣に考えた末、自己(の所有物? 社会の中の人間?)の子供の《教育投資》に、僅かに残された夢を託するようになった。そうして、この地球の上では、同じ時に、《飢えのために、二秒に子供一人》あるいは《毎日、四万人が声もなく死んでゆく》とも言われている。(使われずにすぐに古くなって捨てられて行く億円単位の兵器! 採算上の理由だけで廃棄される過剰農産物!)

そこで、残された道は、ロランもかねてから説いているように、国家という垣根を無くして行くことの努力以外には無いのではないだろうか。現実には、しかしここでも、化けものたち(選び出したのは誰か?)が、殫猛に《軍備》と《国家》とを合体させて行きつつある。

まさに、それらと対峙しうる真の平和のための運動は何か。地球の緑と飢餓を救う運動はどれか。私の許へも、応分の負担と協力を促す《時》がやってきたようだ。

\*

ところで、『ユニテ』と共に五年以上が過ぎた。はからずも、先輩の相浦綾子様を補佐しつつ、編集に携わるようになって、その間、遅ればせながらも、十余冊を出した。もともと私は、ロランの一読者にすぎず、このような仕事において、ずぶの素人であった。相浦様に導かれ、その蓄積された知識と卓越した実行力とから数多くのものを学びながら、今日に至ったのであった。今、かえりみて、もくろみと

挫折が交錯する思い出の中で、忘れられないのは、なによりも幾人かの寄稿者との出会いである。『ユニテ』への執筆依頼の交渉に呼応される時のその姿勢から、あるいは、時に、ふと洩らされた言葉の端々から《真にロラン的な精神》の光を見出し、私は、この仕事の意義と継続するために必要な励ましとを得たのであった。そのような精神こそは、貴重な文章となって、『ユニテ』と共に、これからも永く生き続けて行くことと信じる。それ故に、『ユニテ』の読者のみなさまが、時には『ユニテ』のバックナンバーへ戻って、そこで、《一日の生命をまこと生きる光……魂の韻律……<sup>いのち</sup>底の底に世界をやく一つの焰……》（宮本正清著『生命の歌』）をも汲み上げて下さることを、心からこい願うものである。

## 友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算 271 回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1981年11月28日(土)

269 回例会

第 94 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その 7 (1914～1918)

発表者：大橋 哲夫

出席者 10名

第一次世界大戦の勃発から終戦までの期間で、全ヨーロッパ相手のロランの戦いがくりひろげられたのであるが、ソフィアへの手紙であることを考慮して、なまの激しい表現は控えられている。

1916年には1915年度分としてのノーベル文学賞を受けたこと、書斎の人であったロランが、自らの信条のために行動せざるをえなくな

ったこと、歴史家としてのロランのさめた目が情熱的な無関心という精神の高さを保たせていたこと、等々、例によって十分に準備され練り上げられた好発表であった。

1982年1月30日(土)

270回例会

第95回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィーアへの手紙 その8 (1919～1928)

発表者 森 満夫

出席者 11名

いつも真摯でもの静かな森さんにふさわしい発表であった。

ロランの母の死、著作における創造のよろこびと意欲、ソフィーアへの愛、と三つの項目を立てて、ロランの手紙の中にしばしば出てくる“いとしい母上”“可哀そうな母上”といつもロランの気がかりであったアントワネット・マリが1919年5月19日に亡くなったこと、ガンジー、タゴールの不服従の運動への共感、ソフィーアへの愛、について話された。

1923年、日本では関東大震災がおこり、米騒動があり、騒然とした時期であったが、大戦後のヨーロッパでロランは各国の知識人に、“精神の独立宣言”を送り署名を呼びかけていたのである。50才代から60才代にかけて多くの著作をし、創造することで自ら生きる喜びを創り出していったロランの面目躍如たる時期にあたる。

2月の例会は都合により休会

1982年3月27日(土)

271回例会

第96回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その9（1929～1932）

発表者 大橋 哲夫

出席者 12名

この一年間セミナーで読みつづけてきた400通に及ぶロランの手紙から学びとったものは大きい。今回は総まとめをかねて再び大橋さんが発表して下さいました。

瞑想的・神秘的なものに惹かれていた筈のロランが、タゴールよりもガンジーの行動力へと引きつけられていったのは、こうした時代に生きたロランの宿命であったろう。

歴史上の人物、指導者たちもみんな自分で動いているようで、結局は大きな力で動かされているのだ、と1930年頃からはっきりそういう認識に立つようになったロランであるが、自ら書いているように、  
“私は人類の未来のために戦いつづけますが、人類はけっきょく、希望よりも憐愍の念を私に与えます。それは自然の非論理性です。”という境地に達していたのである。

“人はかつての自分のままでとどまることはできません。しかし人が偉大な別人になることはひじょうに美しいことです。”大橋さんはこの言葉に大層感銘を受けたと結ばれたが、いかにも昨日よりは今日、今日よりは明日と進歩向上をめざして努力される方にふさわしいと思う。

巻を閉じるのが惜しいようなロランのソフィアへのまごころ溢れる手紙集であった。



## あ と が き

いろいろな事情で大層遅れておりました15号をやっとお届けできることになり、肩の荷をおろす気がいたしております。

今回はじめてご寄稿いただきました日高六郎先生は、織田さんから『ユニテ』のために原稿を、とお願いしたところ快くお引受けくださいました。けれどもその後、オーストラリアの大学から招聘されて渡航されることになり、諸種の事情でそれが延びて大変なご繁忙のさなかでしたのに、前からの約束だからということで貴重な時間をお割き下さいました。日本の進歩的知識人として多方面にご活躍の日高先生が、青春の日々、ロランに思いを寄せられたことを知るの大きなよろこびです。私たち戦中派はもとより、若い読者にとっても、得難い先人の心の軌跡として勇氣と励ましを得られることでしょう。日高先生の『ユニテ』へのご好意に心からの感謝を捧げます。

山口三夫先生からは、編集部の原稿集めの苦勞をまたまたお助けいただきました。

ロマン・ロランを師と仰ぎ、ロラン的实践をご自分の課題としておられる山口先生から、『ユニテ』を通して本当に多くのことを学ばせていただきました。ここに改めて御礼を申しあげます。

相浦には、中国文学専攻の立場から、中国におけるロマン・ロランについてこれまで何度か翻訳の勞をとってもらいました。今回は昨秋の訪中でお目にかかった現代中国の指導的知識人の一人である王元化先生の、『ジャン・クリストフ』についての論文二篇を訳出してくれました。中国においてもあの日中戦争の不幸な日々、こうしてロマン・ロランによって魂を鼓舞されていた若い人たちがいたことを知って、大きな感動をおぼえます。

南大路振一先生は、どんなにお忙しい時期でも『ユニテ』に全面的にご協力くださいました。ロラン＝マルヴィーダ往復書簡は、『ユニテ』が装いも新しく1973年に再刊されて以来の、文字通り『ユニテ』と共に読みつがれてきた貴い書簡集です。このご協力がなければ、到底今日まで『ユニテ』の発刊を続けてこられなかったの

ではないかと、願ひて唯々感謝申し上げております。

『ユニテ』14号の「訳者あとがき」に南大路先生が述べられた、のこり11通がこれで完訳されたことになり、『ユニテ』3号の1890年8月17日付マルヴィーダ書簡につなげることができました。この往復書簡は他にはまだ邦訳のない貴重な資料であり、通読を希望される読者の望みも叶えられ、ほんとうにうれしく思っております。モーパッサンやブルジェについてロランがマルヴィーダに手厳しく書いておりますが、思いがけないことに王元化先生の論文にも同じ個所が引用されていて、偶然の一致に驚かされました。まさにロランのいう、「私は何がヨーロッパで、何がアジアなのかを知りません。私はただ世界には二つの種族があることを知っているだけです。一つは向上する魂の種族であり、他方は墮落する魂の種族です。」(ジャン・クリストフから彼の中国の兄弟たちへ、1925、ロマン・ロラン)なのであらうと思いを新たにいたしました。

〈ユニテの広場〉の寺尾文成さんは京都外大大学院に籍を置いて、まじめにロランと取り組んでおられる方で、ロランとの出会いが飾り気なく書かれています。織田和夫さんは編集部を今日まで引っばってこれ、企画も渉外も精力的にこなして下さいました。一介の主婦にすぎない私は、実社会で活躍される織田さんのような実業家が、大変よく読書し勉強し思索されるお姿から実に多くのことを教えられました。今回は特に一会員として〈広場〉にご登場いただきました。

5年前に編集の任に当るようになってから、世の中は大いに変化しましたし、ロマン・ロラン研究所も大きく変わりました。しかし、周囲の事情はどう変わろうとも、『ユニテ』が目指した理念は決して変らないでしょうし、『戦いを超えて』のロランの平和への希求は、現在の世界においてより痛切に渴望されていると思います。

1949年6月「日本・ロマン・ロランの友の会」が設立されたとき、その趣意書には、この会を「善意的個性を交響曲的に調和させる「生きたユニテ」の場であらめたい」と書かれておりました。片山敏彦先生、宮本正清先生が理想に燃えておつくりになった「生きたユニテの場」が、いつまでもつづいていきますようにと切にお願いいたしております。

編集部 相浦 綾子

## 投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切日は特にもうけてはおりません。年2回発行を原則としておりますので、随時お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を5部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

ユニテ 第3期 第15号

発行日 1982年3月31日  
発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所  
京都市左京区銀閣寺前町32  
TEL(075)771-3281  
印刷所 昭和堂印刷所  
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/K/47/ Rolland, Romain: Emmédocle d'Agrigente suivi de L'Eclair de Sinoza. (Editions du Sablier, Paris, 1931)
- /RR/K/48/ Rolland, Romain: Emmédocle D'Agrigente suivi de L'Eclair de Sinoza. (Editions du Sablier, Paris, 1931)
- /RR/K/49/ Rolland, Romain: Le Seuil précédé du Royaume du T. (Mont-Blanc, Genève, sans date)
- /RR/K/50/ Rolland, Romain: Souvenir d'Enfance. (Collection Blanche)
- /RR/K/51/ Rolland; Romain: Le Voyage Intérieur (Songe d'Une Vie.) (Albin Michel, Paris, 1959)
- /RR/K/52/ Rolland, Romain: Le Périole. (Ed. Emile-Paul Frères, Paris, 1946)
- /RR/K/53/ Rolland; Romain: Le Périole. (Ed. Emile-Paul Frères, Paris, 1946)
- /RR/K/54/ Rolland, Romain: Compagnons de Route. (Ed. du Sablier, Paris, 1936)
- /RR/K/55/ Rolland, Romain: Quinze Ans de Combat (1919-1934). (Les Edition Rieder, Paris, 1935)
- /RR/K/56/ Rolland, Romain: De Jean Christophe à Colas Breugnon. -Pages de Journal- (Edition de Salon Carré, Paris, 1946)
- /RR/K/57/ Rolland, Romain: Journal des années de guerre 1914-1919. (éd. Albin Michel, Paris, 1952)
- /RR/K/58/ Rolland, Romain: Inde, Journal 1915-1943. (Albin Michel, 1960)
- /RR/E/59/ Rolland, Romain: Inde, Journal 1915-1943. (Ed. Vineta; Paris, Lausanne, Bale, 1951)
- /RR/K/60/ Rolland, Romain / Hesse: Briefe. (Fretz und Wasmuth Verlag Ag., Zürich, 1954)
- /RR/K/61/ Rolland, Romain / Lugné-Poe: Correspondance 1894-1901. (L'Arche, Paris, 1957)
- /RR/K/62/ Sorella: Histoire d'Une Amitié, Nombreux Textes Inédits de Romain Rolland et d'Alphonse de Châteaubriant. (Académique Perrin, Paris, 1962)
- /RR/K/63/ Rolland, Romain: Choix de Lettres à Malwida Von Meysenbug. Premier Cahier. (Les Bibliolâtres de France, Paris, 1948)
- /RR/K/64/ Rolland, Romain / Malwida Von Meysenbug: Ein Briefwechsel 1890-1891. (J. Engelhorn's Nachf., Stuttgart, 1932)
- /RR/K/65/ Rolland, Romain: Le Triomphe de la Liberté. -Fête Populaire, Musique de Albert Doyen- (Alphonse Leduc et Cie Editions Musicales, Paris, 1917)
- /RR/K/66/ Adams, Jane; etc.: Liber Amicorum Romain Rolland. (Rotapfel-Verlag, Zürich und Leipzig, 1926)
- /RR/E/67/ Rolland, Romain; etc.: Victor Hugo -Numéro Spécial- Europe. (Les éditions Rieder, Paris, 1935)
- /R.I./68/ Rolland, Romain: Pages Choisies de Romain Rolland II. (Librairie Ollendorff, Paris)



- /RR/K/69/ Lévy, Arthur R. : L'Idéalisme de Romain Rolland. (A. -G. Nizet, Paris, 1945)
- /RR/K/70/ Krauf, Miriam: La Conception de la Vie Héroïque dans l'Oeuvre de Romain Rolland. (Le Cercle du Livre, Paris, 1956)
- /RR/K/71/ Götzfried, Hans Leo: Romain Rollands Heroischer Idealismus. (Duruck und Verlag von Götzfried, Freudenstadt, 1929)
- /RR/K/72/ Granoin, Pierre: Le Bund Neues Vaterland (1914-1916), -ses rapports avec Romain Rolland. (Bibliothèque de la société des études germaniques; Paris, Lyon, 1952)
- /RR/K/73/ Kuchler, von Walther: Romain Rolland / Henry Barbusse / Fritz Von Unruh. (Verlag August Lutzeyer, Frankfurt a.M., 1949)
- /RR/K/74/ Ilber, Werner: Romain Rolland -Essay- (Rütten und Loening, Leipzig, 1951)
- /RR/K/75/ Baudouin, Charles; etc.: Hommage à Romain Rolland. (Sd. du Mont-Blanc, Genève)
- /RR/K/76/ Doisy, Marcel: Romain Rolland 1866-1944. (Les Lettres Latines, Bruxelles, 1945)
- /RR/K/77/ Saint-Prix, Jean de: Lettres (1917-1919) par Jean de Saint-Prix. Préface de Romain Rolland. (F. Kieder et Cie, Paris, 1924)
- /RR/K/78/ Descotes, Maurice: Romain Rolland. (Les éditions du Temps Présent, Paris, 1948)
- /RR/K/79/ Piérard, Louis; etc.: Romain Rolland et la Belgique. (L'Enseigne du chat qui pêche, Bruxelles-Paris, sans date)
- /RR/K/80/ Barrère, Jean-Bertrand: Romain Rolland par Lui-même. (éditions du Seuil, sans place, sans date)
- /RR/K/81/ Barrère, Jean-Bertrand: Romain Rolland par Lui-même. (Aux éditions du Seuil, Paris, sans date)
- /RR/K/82/ Rolland, Romain: Johann Christof In Paris. -Roman- (Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1920)
- /RR/K/83/ Rolland, Romain: Johann Christof Am Ziel. -Roman- (Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1918)
- /RR/K/84/ Rolland, Romain: Johann Christof. -Roman- (Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1914)
- /RR/K/85/ Rolland, Romain: John Christopher IV. Journey's End. (William Heinemann, London, 1913)
- /RR/K/86/ Rolland, Romain: Jean-Christopher. (The Modern Library, New York, 1913)
- /RR/K/87/ Rolland, Romain: Colas Breusson. (Henry Holt and Company, New York, 1919)
- /RR/K/88/ Rolland, Romain: Clerambault. (Rütten und Loening, Frankfurt a.M., 1922)
- /RR/K/89/ Rolland, Romain: Clerambault. -The story of an independent spirit during the war. (Henry Holt and Company, New York, 1921)
- /RR/K/90/ Rolland, Romain: Peter und Ina. -Eine Erzählung- (Kurt Wolff Verlag, München, 1921)

幼年時代をフランス中部の風光明媚なニヴェルネ地方の自然に育まれたロマン・ロランがバリのアスファルトの上に移植されたとき、彼の存在の根はもうすこしで枯死するところであった。そんなとき、彼をこの世界にかろうじて繋ぎとめていたのは音楽から来る慰めの力であったが、当時高等中学の学生だったロマン・ロランは、ある日、スピノザの『エチカ』を読み、そこから進り出る火花に激しい衝撃を受けた。彼は自分の存在を肯定する確信をそこから得たのであった。この体験は生涯にわたって大きな影響をのこすことになるのであるが、この点について、のちに彼は精神的自伝『内面の旅路』のなかでつぎのように語った、——「……スピノザのテキストのなかに私が見出したのはスピノザではなくて、私自身の知らなかった自分であった。『エチカ』の入口に刻まれている銘のなかに、燃えている文字で書かれたこれらの〈定義〉のなかに私が読みとったのは、彼が言ったことではなくて、私が言いたかったこと、私自身の子どものいい思想がそのたどたどしい口調で言いあらわそうとしていたことであった」

私自身に問題を置き換えてみれば、たとえば若いころにロマン・ロランの諸作を知るということにはなによりもそのような出会いの性質があったし、とりわけ『内面の旅路』のような書物を読むことがある種の新鮮な驚きを伴った烈しいよろこびの経験であったことも確かである。私はそれまで、このような本を読んだことがなかったとはっきり感じた。しかも、一読、すぐさま、これこそは自分の探し求めていたものであり、また、それが今後生涯にわたってもはや自分と無縁のものになることはあり得ないだろうと、明瞭に確信していたのである。

ロマン・ロランの諸作の並べられている私の書棚には、とりわけ想い出深い一冊がある。それはまだ増補決定版が刊行される以前の、一九四二年、パリ、アルバン・ミッシェル社刊の『内面の旅路』のあまり厚くない一冊である。なかには各処に赤や青の色鉛筆で下線が引かれ、書き込みがされているが、それらの書き込みは私の手になるものではない。そして、この本を手にし、また、色鉛筆の跡を目にするたびに、私は自分にとってかけがえない人間関係の一つがこの地上のものであったことを慥かめ、しばらくのあいだ、胸中に去来する想いを鎮めかねるのである。

こうした出会いが書物や芸術作品でなく、現に肉の存在である一人の人をめぐってのものである場合には、そのことによって刻み込まれる印は心にさらに深くのこり、時経てのちにふり返るとき、いったいどこまでが本来の自分だったのか、また、どこまでがその出会いによって自分の蒙った影響であるのかを判然とさせることなど、とても不可能ではあるまいかと思われるほどである。